山口県埋蔵文化財センター調査報告　第37集

竜王南遺跡Ⅱ

2003

財団法人　山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター

序

地下に埋もれている遺跡は、先人の日々の生活と、不断の努力を知るうえで大変貴重な資料であり、国民共有の財産と言えるでしょう。こうした遺跡は本来、現状保存が望ましいところですが、開発工事などによりやむを得ず消失するものにつきましては、関係機関と調整を図り、記録保存を行うことになっております。

本書は、広域営農団地農道整備事業に先立ち、菊川町大字吉賀・七見に所在する竜王南遺跡について山口県農林部から委託を受けて山口県教育財団が実施した発掘調査の記録をまとめたものです。

調査の結果、弥生時代の住居跡や土坑といった遺構、弥生土器や石器などの遺物が確認され、当時のムラの姿の一端を垣間見ることができました。こうした資料は先人の息吹を今に伝え、地域の歴史を語るうえで大変重要なものです。

歴史を学ぶということはすなわち、自分自身が今、どのような時代に生き、未来に何を残すかを考えるということであり、決してロマンの世界に浸るということではありません。私たちの祖先は所与の環境の中で、お互いに智恵を出し合い、より良い社会をつくるために努力してきましたが、我々にも同様な課題が課せられていると言えます。

この報告書が学術研究書としてのみならず、教育や文化財愛護思想の普及に広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書作成に際しまして多大なご尽力とご協力をいただきました地元の皆様方、関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成15年３月

財団法人　山口県教育財団
理事長　牛見　正彦

例　言

1　本書は、山口県豊浦郡菊川町大字吉賀・七見に所在する竜王南遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、広域営農団地農道整備事業に伴い、財団法人山口県教育財団が山口県の委託を受けて実施したものである。

3　調査組織は次の通りである。

調査主体　財団法人山口県教育財団　山口県埋蔵文化財センター

調査担当　調査研究員　小南　裕一

指導主事　上田　俊宏

指導主事　徳永　裕

4　調査にあたっては、山口県教育委員会、山口県農林部農村整備課、山口県豊田農林事務所、並びに地元関係各位から協力・援助を得た。

5　本書の図1は、国土地理院発行の5万分の1地形図「厚狭」「安岡」を複製使用したものである。

6　石材の鑑定については、下記の各氏に依頼した。記して謝意を表す。

山口大学理学部地球科学教室　教授　今岡　照喜

山口県立山口博物館　専門学芸員　亀谷　敦

なお、石材鑑定は表面観察によるものである。

7　本書に使用した方位は、個別実測図は磁北、それ以外は国土座標（世界測地系）の北で示す。
また、標高は海抜標高である。

8　本書に使用した土色の色調表記は、農林省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式に従った。

9　図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。

10　土器実測図の断面は、黒塗りが須恵器を表す。

11　本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

ＳＢ：建物　ＳＫ：土坑　ＳＰ：柱穴　ＳＤ：溝状遺構　ＳＸ：不明遺構

12　本書の作成・執筆は、小南・上田・徳永が共同で行い、編集は小南が行った。

本文目次

Ⅰ　遺跡の位置と環境……1
Ⅱ　調査の経緯と概要……3
Ⅲ　調査の成果
　1　遺構と遺物
　　(1)　竪穴住居……7
　　(2)　土坑……11
　　(3)　焼土坑……27
　　(4)　溝……28
　　(5)　不明遺構……30
　　(6)　柱穴……31
　2　遺物包含層の調査
　　(1)　南側包含層出土遺物……32
　　(2)　北側包含層出土遺物……38
Ⅳ　まとめ……41

図版目次

図版１　調査区遠景
図版２　調査区全景
図版３　ＳＢ１
図版４　ＳＢ２
図版５　ＳＫ１・３・４・５・６・８・９・10・11
図版６　ＳＫ12・13・18
図版７　ＳＫ15・16・17・19・20・21・22・23
図版８　ＳＫ26
図版９　ＳＫ24・27・29・30・31・35・36・37
図版10　ＳＫ33
図版11　ＳＫ32・33・39・40・41・45　ＳＤ６
図版12　ＳＫ14・25・28・34　ＳＰ21
図版13　ＳＸ１
図版14　ＳＸ２　南側包含層
図版15　北側包含層　近代炭焼窯
図版16　出土遺物(1)
図版17　出土遺物(2)
図版18　出土遺物(3)
図版19　出土遺物(4)
図版20　出土遺物(5)
図版21　出土遺物(6)
図版22　出土遺物(7)
図版23　出土遺物(8)
図版24　出土遺物(9)
図版25　出土遺物(10)
図版26　出土遺物(11)

挿図目次

図１　遺跡の位置と周辺の主な遺跡……2
図２　調査区設定図……4
図３　遺構配置図……5・6
図４　ＳＢ１実測図……8
図５　ＳＢ１出土遺物実測図……8
図６　ＳＢ２実測図……9
図７　ＳＢ２出土遺物実測図(1)……10
図８　ＳＢ２出土遺物実測図(2)……11
図９　ＳＫ１・３・５・６実測図……12
図10　ＳＫ８・９・10・12実測図……13
図11　ＳＫ13実測図……14
図12　ＳＫ10・12・13出土遺物実測図……14
図13　ＳＫ16実測図……15
図14　ＳＫ18実測図……16
図15　ＳＫ18出土遺物実測図……16
図16　ＳＫ19・20・21・22・23・24実測図…18
図17　ＳＫ26実測図……19
図18　ＳＫ21・22・24・26出土遺物実測図…19
図19　ＳＫ27・29実測図……20
図20　ＳＫ29出土遺物実測図……20
図21　ＳＫ30・31・33実測図……21
図22　ＳＫ33出土遺物実測図(1)……23
図23　ＳＫ33出土遺物実測図(2)……24
図24　ＳＫ33出土遺物実測図(3)……24
図25　ＳＫ36実測図……25
図26　ＳＫ37実測図……25
図27　ＳＫ37出土遺物実測図……25
図28　ＳＫ39・40・42実測図
・ＳＫ42出土遺物実測図……26
図29　ＳＫ14・25・28・34実測図……28
図30　ＳＫ34出土遺物実測図……28
図31　ＳＤ６実測図……29
図32　ＳＤ６出土遺物実測図……29
図33　ＳＸ１実測図……30
図34　ＳＸ１出土遺物実測図……30
図35　ＳＸ２実測図……30
図36　ＳＸ２出土遺物実測図……31
図37　ＳＰ21実測図……31
図38　ＳＰ21出土遺物実測図……31
図39　ＳＰ33出土遺物実測図……31
図40　調査区南側包含層土層実測図……32
図41　調査区南側包含層
出土遺物実測図(1)……35
図42　調査区南側包含層
出土遺物実測図(2)……36
図43　調査区南側包含層
出土遺物実測図(3)……37
図44　調査区北側包含層
出土遺物実測図(1)……39
図45　調査区北側包含層
出土遺物実測図(2)……40

Ⅰ　遺跡の位置と環境

竜王南遺跡は豊浦郡菊川町大字吉賀・七見に所在する。

菊川町は、山口県の南西部に位置し、田部盆地を中心とした内陸の町である。南は下関市、北は豊田町、西は豊浦町と接し、古来からの交通の要所である。菊川町の北側は、霊山として崇められてきた「華山」(標高713.3m)をはじめとする華山山地が連なり、西側・南側は200～300m級の山々に囲まれている。また、木屋川が東縁を北から、田部川が南縁を西から貫流し、田部盆地の南東部で合流する。盆地平野の大部分は、田部川の氾濫原と、北に岡枝、南に七見の二つの扇状台地から形成される。

本遺跡は、田部盆地の南西部の六万坊山(標高395.2m)から北東へ舌状に延びる丘陵上にあり、昨年度の調査区に南接する尾根上に位置する。遺跡の標高は、約36～48mを測り、正面に吉賀の洪積台地、その右方向に歌野の扇状台地を望むことができる。

田部盆地ではこれまでに多くの遺跡が確認されているが、町内の遺跡に関しては昨年度の報告書で詳述しており、ここでは近接する豊浦町との関わりを踏まえ、弥生時代を中心に概観していく。

田部盆地では弥生時代になると多くの遺跡が出現する。特に、弥生前期中頃には各地で集落が形成されたことが確認されており、下七見遺跡・上原遺跡・山ノ口遺跡・坂の上遺跡等がその代表的なものである。中でも下七見遺跡は、屋外周溝を伴う竪穴住居や土坑群が多数検出され、当地域を代表する拠点的集落である。また、すぐ北側の低湿地に位置する岸本遺跡では、水田跡の存在が指摘されており、居住域と生産域の関連を示す可能性がある。上原遺跡では、豊浦町中ノ浜遺跡や高野遺跡でも出土している山形重弧文土器、袋状土坑等が確認されている。また、下七見遺跡や山ノ口遺跡からは多くの石斧の未製品が出土している。工房跡は確認されていないものの、石器生産に必要な砥石や敲石等と、石器製作の際に生じる剥片や石屑が多量に出土していることからも、石斧に代表される石器の生産がこの地域で盛んであったと推察される。

こうした遺跡の遺構や遺物は、弥生前期から中期初頭に属するものが多く、中期のものは殆ど認められない。しかし、下七見遺跡等では再び中期後半から遺構や遺物が認められるようになる。

一方、菊川町に隣接する豊浦町黒井・川棚地区でも、弥生時代の遺跡が数多く報告されている。

弥生前期には、低湿地の遺跡として田島遺跡・山の神遺跡・無田遺跡等が確認されている。無田遺跡では田下駄等の木製品が出土しており、水田耕作の可能性が指摘されている。一方、低丘陵上には高野遺跡や吉永遺跡といった大規模な集落が形成される。この両遺跡は、その出土遺物の多さや環壕の存在などから、当地域の拠点的集落と言える。しかし、こうした遺跡も田部盆地の諸遺跡と同じく、中期段階になると遺構や遺物が減少し、集落の断絶を伺うことができる。

また、同時期の遺跡である大門遺跡からは、石器の未製品・黒曜石の石核・珪化木の剥片が大量に出土しており、石鏃等の小型石器の生産を自給的に行っていた様子が読みとれる。

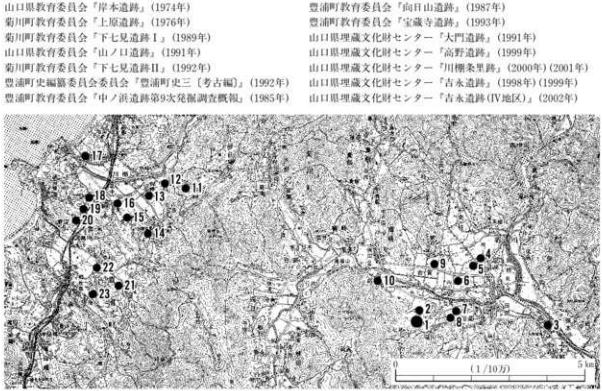
上述した吉永・高野遺跡等にみられる弥生中期の空白期を埋めるのが、城山・向日山・宝蔵寺等の遺跡である。こうした遺跡は中期初頭までの遺跡立地と異なり、より高地に立地している。宝蔵寺遺跡は高野台地の最上方に位置し、竪穴住居や袋状土坑が確認されている。城山遺跡（標高196m）と

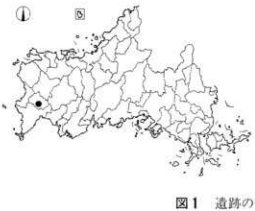
向日山遺跡（標高70ｍ）は高地性集落であり、どちらの遺跡からも竪穴住居や土坑群が検出され、土器・石斧・石剣・鉄鏃等の遺物が出土した。中でも向日山遺跡から検出された烽火台と推定される土坑は、城山遺跡との連絡で使用された可能性を示唆する貴重な遺構である。ただ、向日山遺跡は出土遺物の総量が少なく、遺構の重複が認められない。このことは、向日山遺跡が緊急時において使用された一時的な集落であったと考えられる。こうした前期と中期の集落立地の変化は、海進等の自然環境の変化、弥生時代の社会発展に伴う集団間の緊張を反映している可能性がある。

後期から終末期にかけて、再び集落は低丘陵上へと移行しており、川棚条里跡・吉永遺跡・林崎遺跡・船頭遺跡はその代表例である。

これまで述べてきたように、内陸に位置する菊川町と響灘に面する豊浦町とは、集落が中期段階で一時衰退する傾向にあること、山形重弧文に代表されるような共通の土器文様を有すること等から、両地域は互いに交流を行い、影響を与え合いながら発展してきたと言える。

〔引用参考文献〕
菊川町教育委員会『菊川町史(二)』(1985年)
山口県教育委員会『岸本遺跡』(1974年)
菊川町教育委員会『上原遺跡』(1976年)
菊川町教育委員会『下七見遺跡Ⅰ』(1989年)
山口県教育委員会『山ノ口遺跡』(1991年)
菊川町教育委員会『下七見遺跡Ⅱ』(1992年)
豊浦町史編纂委員会委員会『豊浦町史三〔考古編〕』(1992年)
豊浦町教育委員会『中ノ浜遺跡第9次発掘調査概報』(1985年)
豊浦町教育委員会『城山遺跡』(1986年)
豊浦町教育委員会『向日山遺跡』(1987年)
豊浦町教育委員会『宝蔵寺遺跡』(1993年)
山口県理蔵文化財センター『大門遺跡』(1991年)
山口県理蔵文化財センター『高野遺跡』(1999年)
山口県理蔵文化財センター『川棚条里跡』(2000年)(2001年)
山口県理蔵文化財センター『吉永遺跡』(1998年)(1999年)
山口県理蔵文化財センター『吉永遺跡(Ⅳ地区)』(2002年)





1　竜王南遺跡(平成14年度調査区)
2　竜王南遺跡(平成13年度調査区)
3　上原遺跡　4　大日寺古墳　5　坂の上遺跡
6　沖古遺跡　7　岸本遺跡　8　下七見遺跡
9　植松古墳群　10　山ノ口遺跡　11　城山遺跡
12　向日山遺跡　13　川棚条里跡　14　宝蔵寺遺跡
15　高野遺跡　16　林崎遺跡　17　中ノ浜遺跡
18　田島遺跡　19　無田遺跡　20　山の神遺跡
21　船頭遺跡　22　吉永遺跡　23　大門遺跡

図１　遺跡の位置と周辺の主な遺跡

Ⅱ　調査の経緯と概要

山口県農林部農村整備課では、下関市王司地区と菊川町七見地区を結ぶ広域営農団地農道整備事業を計画した。農道の路線決定にあたっては、山口県遺跡地図を参考に、可能な限り周知の埋蔵文化財包蔵地を避ける手だてがとられたが、平成12年度の試掘調査の結果、建設予定地の一部に中世墓の存在が想定された。そこで関係機関（県農村整備課、県豊田農林事務所、山口県教育委員会文化財保護課）が協議の結果、財団法人山口県教育財団　山口県埋蔵文化財センターが、平成13年度に1,500㎡の発掘調査を行った。さらに平成13年度の試掘調査で、丘陵のさらに南西部に弥生時代集落の存在が予想されたため、平成14年度に4,000㎡の範囲を発掘調査することとなり、財団法人山口県教育財団　山口県埋蔵文化財センターに調査が委託されることになった。

なお、平成13年度の調査成果に関しては、すでに『竜王南遺跡』（山口県埋蔵文化財センター調査報告　第31集）として刊行されており、本書では平成14年度に実施した発掘調査の成果を『竜王南遺跡Ⅱ』として報告する。

平成14年４月初旬より、調査区の現況確認、県豊田農林事務所との打ち合わせ等、事前の諸準備にとりかかり、４月下旬には近隣の小・中・高等学校、消防署等に安全確保のための協力と理解をお願いした。その後、５月15日に現場プレハブの設置、翌16日に器材を搬入して本格的な発掘調査に入った。

調査区の近辺では、すでに一部道路建設のための工事が始まっており、掘削土を運搬する都合上、調査区の約半分を工事用仮設道路としておく必要があったため、まず調査区の南半分を調査し、終了後、北半分を調査するという方法を採った。また、このように調査区のすぐ脇で工事が行われている状況であったため、作業中の安全確保には細心の注意を払った。

調査区南半の調査はまず人力でトレンチ掘りを行い、遺構面を確認することから始め、しかるのち、重機を投入し、調査区全面の表土を除去した。表土はおもに腐植土で、平均30㎝程度の厚さで堆積しており、この中には遺物はほとんど含まれていなかった。この段階で弥生時代の土坑数基と円形竪穴住居跡を検出することができ、また調査区の南東部斜面に遺物包含層が広がることを確認した。表土除去後、遺構検出作業と遺構の堀込み、遺物包含層の掘り下げを行った。遺構はいずれも残存状況が悪く、遺物も完形品に近いものは出土しなかったが、猛暑の中、作業員は粘り強く作業を続けた。また、遺物包含層の調査は、ある程度の大きさの土器片について、出土地点を平板に落とし、レベルを記録したのち取り上げた。こうした遺構、包含層の堀込みや個別遺構の実測が８月中にはほぼ終了したため、９月５日に調査区南半部の空中写真撮影を行い、終了後すぐさまグリット実測と駐目押し作業（遺構面の再精査と深掘り）を行った。この際、土師坏の底部が出土したものの、時間に追われていたため、写真や図面を記録せずに取り上げてしまったが、その真下から完形の鈴が出土した。このことによって鈴の資料的な価値が半減してしまった。調査主任として猛省したい。

調査区北半分の調査は、重機を使った表土除去から始まった。仮設道は南半に付け替えられたが、南西端は依然仮設道として使用されていたため、この部分に関しては最後に調査することとした。

表土除去ならびに遺構検出の結果、ほぼ中央部の最も標高が高い地点で住居跡や土坑、北東端の谷部で遺物包含層の存在を確認することができた。遺構の数、残存状況ともに南半部より多く、遺物も完形品に近いものが数点出土した。こうした遺構ならびに包含層の堀込み、さらに仮設道として最後まで残っていた南西端部の表土除去と精査終了後、2回目の空中写真撮影を11月20日に実施し、その後、グリット実測、駄目押し作業を行い、12月10日には委託者に現場の引き渡しを完了し、現地での全ての作業を終了した。

現地での作業終了後、山口県埋蔵文化財センターにおいて、記録図面の整理や出土遺物の図化・写真撮影を行い、本報告書刊行の運びとなった。

本年度は梅雨時期も雨が少なく、日程的には余裕があったが、そのために遺構検出等で水が不足し、苦労した面も多かった。特に7月、8月は雨がほとんど降らず、気温が高い日が続き、過酷な条件の下での作業であったが、作業員の皆さんは忍耐強く仕事を続けられた。また、調査員、作業員ともに大きな怪我もなく調査を終了することができたのは、ひとえに関係各位の多大なご理解、ご協力によるものであり、ここに感謝の意を表したい。

重機による表土除去

作業風景

空撮風景

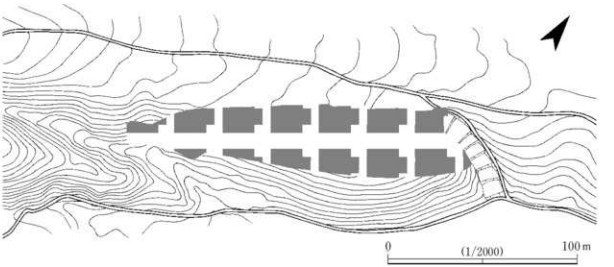


図2 調査区設定図

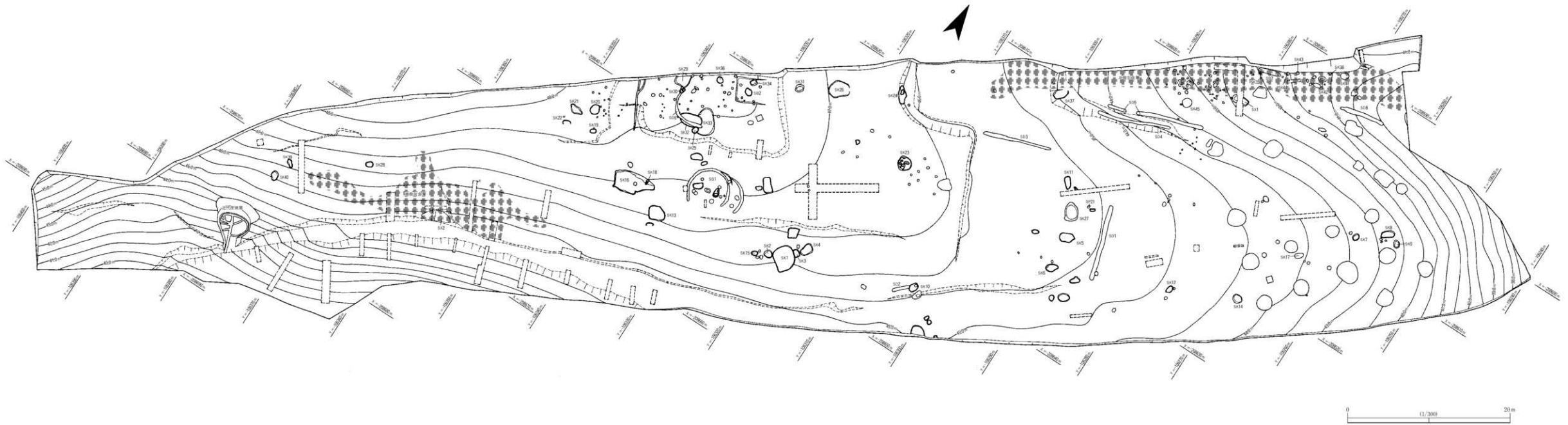


図3　遺構配置図

Ⅲ　調査の成果

1　遺構と遺物

本遺跡は、標高36ｍ～48ｍの丘陵上にあり、北西側から南東側にかけての斜面上に広がっている。

遺構面は、森林の腐植土及び堆積土の下から検出されたが、後世の畑作利用のために広い範囲で削平を受けていた。遺構面の削平は、遺跡の中央付近から北東側にかけて確認されたが、特に中央部の削平が激しいため、場所によっては遺構が失われていることも考えられる。

本調査で検出した遺構は、竪穴住居跡２軒、土坑45基、溝状遺構８条、柱穴約140基、不明遺構２基などである。昭和の遺構とみられる大型の炭焼窯１基も、調査区の南西部で検出された。

また、調査区北東部の丘陵先端付近では、樹根跡が16基確認された。元地権者によると、戦後間もない頃、先代が梨の木を植林するために、ダイナマイトを使用してあけたものだそうである。

それぞれの遺構は、遺跡の中央部に多く分布し、北東部や南西部ではまばらに分布していた。遺構の密度が薄いことも、削平によるところが大きいと推測できる。

遺物については、弥生時代の土器片・石器、土師器の甕、土師器の坏、青銅製の鈴、須恵器、陶磁器片が出土しているが、そのほとんどが弥生時代中期前葉～中葉の土器片で、遺構も大半はその時期のものである。石器については、太型蛤刃石斧が大半を占め、その多くが未製品であった。これは、本遺跡の特徴の一つといえる。以下に、主要な遺構と遺物について紹介する。

なお、以下の文中に出てくる規模に関する数値は、いずれも残存している状況でのものである。

(1)　竪穴住居

今回の調査で検出された２軒の竪穴住居は、平面形は異なっているが、埋土の状況や出土遺物から、いずれも弥生時代の住居跡である。

ＳＢ１（図４・５　図版３）　ＳＢ１は、調査区中央部で検出された円形の竪穴住居である。遺構面の削平が激しいことと、北から南にかけて緩やかに下がる斜面上に位置していることから、住居跡の南側部分は確認できなかった。住居跡の直径は5.3ｍで、壁の立ち上がりは削平により失われていたが、幅25～30㎝、深さ８～10㎝の周溝は検出できた。４本の主柱穴と中央部に炉跡と推測される土坑も検出された。また、床面東側には、長径120㎝、短径70㎝、深さ６㎝の土坑が、西側には、長径126㎝、短径76㎝、深さ８㎝の土坑が主柱穴に挟まれるように掘り込まれていた。

ＳＢ１は、東側に拡張が行われており、1.8ｍ東側に幅20～40㎝、最深部で12㎝の周溝が確認できた。その周溝の西側からは、拡張後の主柱穴と想定できる柱穴も２基検出された。

遺物は弥生土器片と、拡張前の周溝から砥石が１点出土している。また、主柱穴の一つから壺の口縁部が出土し、炉跡の上面からも弥生土器片が多数出土した。

出土遺物（図５　図版16）　１は口縁部が「く」の字形に屈曲する甕形土器。２は鋤先口縁の壺で、復元口径23.0㎝を測る。器壁の荒れが著しく調整は不明。３は砥石で、長さ16.5㎝、幅4.0㎝、厚さ3.7㎝、重量460ｇを測る。正面と両側面が使用されており、砥石目は非常に細かい。石材は砂岩である。２に図示した土器からＳＢ１は弥生時代中期中葉～後葉に築かれたものであろう。

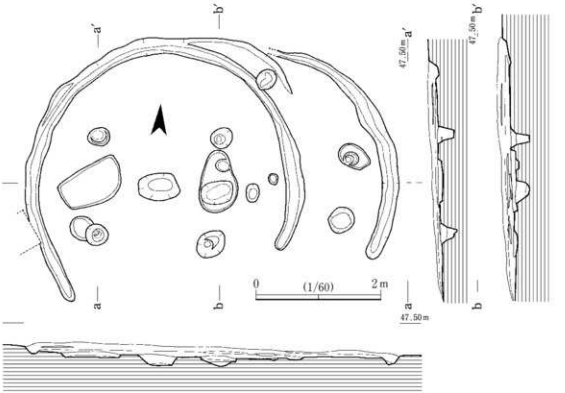


図4　ＳＢ１実測図

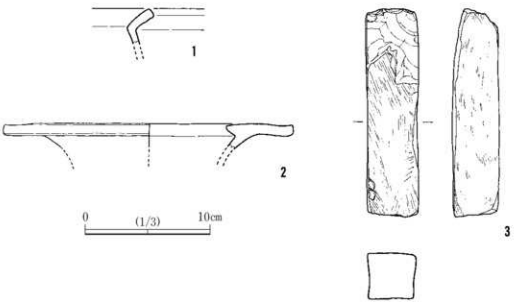


図5　ＳＢ１出土遺物実測図

ＳＢ２（図６　図版４）　ＳＢ２は、調査区中央部北側の標高の高い場所で検出された方形の竪穴住居である。ＳＢ２もＳＢ１同様に、遺構の残存状況が悪く、東側の壁は完全に消失している。

住居跡の規模は、南北3.3ｍ、東西４ｍ（推定）、最深部８㎝ほどである。主柱穴は確実のものとして２基検出され、中央付近には、長径102㎝、短径84㎝、深さ12㎝の炉跡が検出された。また、北側の床面に、後世の遺構と考えられるＳＫ34が掘り込まれている。

遺物としては、遺構の残存状態がよくないにもかかわらず、床面に張り付くようにして多数の弥生土器片が出土した。他に、２点ほど姫島産黒曜石の剥片が出土している。

出土遺物（図７・８　図版16・17）　４～７は口縁部が「く」の字形に屈曲する甕形土器である。４は胴部が強く張り出すタイプで、外面に刷毛目調整が施されている。５．６は口縁部が強く外反し、胴部がすぼまる形態である。６は外面に刷毛目調整痕が認められる。７は復元口径23.2㎝を測り、外面はナデ調整によって仕上げられている。８は鋤先口縁の初現的な形態を示すもので、復元口径22.2㎝、残存高7.7㎝を測る。外面に刷毛目調整痕が若干認められる。９は鋤先を呈する壺の口縁部で、器壁が薄く仕上げられている。10は口唇部が欠損しているため明らかではないが、鋤先口縁の初現的な形態を呈するものであろう。11は口縁部が「く」の字形に屈曲し、頸部に断面三角形の突帯を貼り付ける甕形土器で、復元口径36.0㎝、残存高9.9㎝を測る。12～17は底部で、このうち13は壺形土器の、その他は甕形土器の底部である。甕形土器の底部は総じて中厚で、上げ底状のもの（12、17）と平底に近いもの（14、16）がある。また15は凸レンズ状の底部形態に近く、やや異質であるが、後期に認められる凸レンズ状底部とは異なる。底径は12が5.6㎝、13が6.0㎝、14が7.0㎝、15が6.2㎝、16が7.4㎝(復元径)、17が7.6㎝を測る。18、19はいずれも姫島産黒曜石の剥片で、18は長さ3.2㎝、幅2.5㎝、厚さ0.9㎝、重量6.4ｇ、19は長さ3.7㎝、幅1.7㎝、厚さ0.6㎝、重量3.9gを測る。こうした出土遺物からＳＢ２は弥生中期前葉の所産と考えられる。

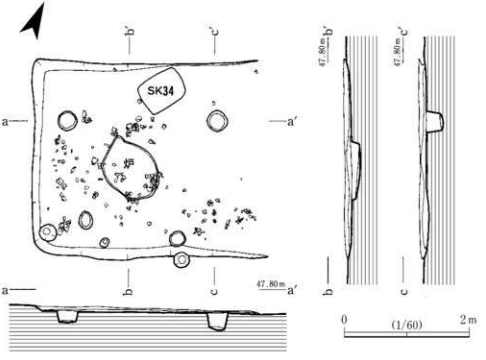


図６　ＳＢ２実測図

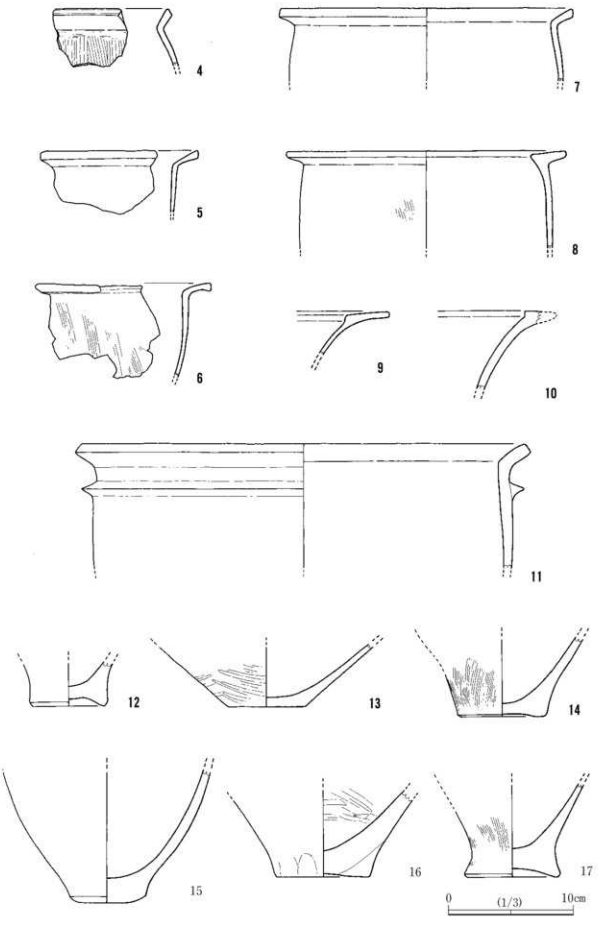


図7　ＳＢ２出土遺物実測図(1)

(2) 土坑

今回の調査では、45基の土坑を検出した。土坑は、調査区中央部の標高の高い部分に多く分布し、北東部の谷筋に当たる部分にも比較的まとまって分布していた。

竪穴住居と同じく畑作利用のための削平を強く受けているため、北東側の谷筋で検出された土坑以外は浅いものが多く、本来の形状を保っているものは少ない。特に、標高の高い場所で検出された土坑は、平面形がはっきりと確定できない土坑も数基あった。最終的に確認できた平面形は、円形が10基、長円形が22基、隅丸長方形２基、不整形が11基で、長円形が最も多かった。

遺物は全体の約３分の２にあたる33基から出土したが、残りの12基からは何も出土しなかった。出土した遺物は、弥生土器片及び石器で、弥生土器は全て弥生時代中期に属するものであった。以下それぞれの土坑について説明していく。

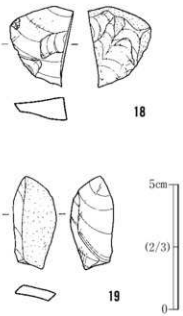


図８　ＳＢ２出土遺物実測図(2)

ＳＫ１（図９　図版５）　調査区中央部でＳＫ３を切る状態で検出された大型の円形土坑で、長径295㎝、短径255㎝、深さ10㎝の規模をもつ。埋土は、礫を含むにぶい黄橙色（10ＹＲ 7/5）砂質土で、地山と酷似していたため、平面形の確定が困難だった。埋土の上面から弥生土器片が出土した。

ＳＫ２（図３）　ＳＫ１の西側で検出された円形の土坑で、長径106㎝、短径90㎝、深さ11㎝である。埋土は、礫を含むにぶい黄橙色（10YR 6/4）砂質土の単層で、遺物は出土していない。

ＳＫ３（図９　図版５）　ＳＫ１に切られる形で検出された。長径97㎝、短径70㎝、深さ12㎝の円形の土坑。埋土は、にぶい黄褐色（10YR 5/3）砂質土の単層で、上層から弥生土器片が出土した。

ＳＫ４（図３　図版５）　ＳＫ１の北側に隣接する。長径170㎝、短径120㎝、深さ10㎝の長円形の土坑である。埋土は、礫を含むにぶい黄橙色（10YR 7/4）砂質土の単層で、遺物は出土しなかった。

ＳＫ５（図９　図版５）　調査区北東側に位置する長円形の土坑である。規模は、長径192㎝、短径110㎝、深さ12㎝。埋土は、橙色（7.5ＹＲ 7/6）粘質土の単層。遺物は出土していない。

ＳＫ６（図９　図版５）　ＳＫ５の南側に位置する不整形の土坑である。長径159㎝、短径100㎝、深さ15㎝の規模をもつ。土坑の底部に長径25㎝、短径22㎝、深さ20㎝のピットが１基検出された。埋土は、橙色（7.5ＹＲ 7/6）粘質土の単層で、土坑内のピットも同一の埋土であった。遺物は、弥生土器の小片が１点、上層から出土しているのみである。

ＳＫ７（図３）　調査区北東部の丘陵の先端近くで検出された長円形の土坑である。長径96㎝、短径66㎝、深さ８㎝の規模をもつ。埋土は、にぶい黄橙色（10ＹＲ 6/4）粘質土。遺物は出土しなかった。

ＳＫ８（図10　図版５）　調査区北東の丘陵の先端部分に位置する長円形の土坑。規模は長径173㎝、短径82㎝、深さ15㎝。埋土は、にぶい黄橙色（10ＹＲ 6/4）砂質土。弥生土器片が３点出土しているが、いずれも上層のものである。形状から、土坑墓の可能性も否定できないが、土層観察では、それを裏付ける証拠は得られなかった。

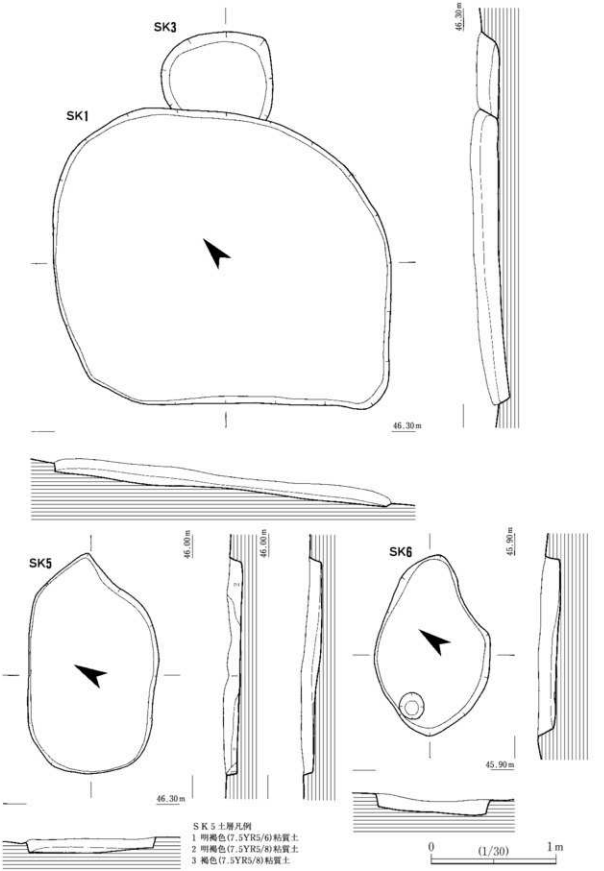


図9　ＳＫ１・３・５・６実測図

ＳＫ９（図10　図版５）　ＳＫ８の東側に隣接する。長径98㎝、短径75㎝、深さ８㎝の長円形の土坑である。埋土は、明黄橙色（10ＹＲ 6/6）砂質土。埋土と地山の土との区別がつきにくく、底部の確定は困難であった。遺物は出土していない。

ＳＫ10（図10　図版５）　調査区中央で、ＳＤ２を切った状態で検出された長円形の土坑である。長径126㎝、短径93㎝、深さは10㎝。埋土は、にぶい黄褐色（10ＹＲ 6/4）粘質土。土坑内に直径34㎝、深さ10㎝のピットがある。弥生土器片が数点出土した。

出土遺物（図12）　20は甕形土器の口縁部で、内外面ともにナデ調整である。

ＳＫ11（図３　図版５）　長径160㎝、短径70㎝、深さ６㎝の長円形の土坑で、ＳＫ５の北西方向に位置する。埋土は橙色（7.5ＹＲ 7/6）の粘質土で、ＳＫ10同様、底部の確定は困難であった。遺物は、弥生土器片が数点出土している。

ＳＫ12（図10　図版６）　調査区北側の南端に位置する。長径104㎝、短径67㎝、深さ15㎝の不整形の土坑。埋土は、にぶい褐色（7.5YR 5/4）の粘質土。北東部分が、円形のピットに切られていた。弥生土器片が多数出土したが、同一個体とは考えにくい土器片ばかりであった。

出土遺物（図12）　21は壺形土器の口縁部で、端部が若干肥厚し、内外面ともナデ。

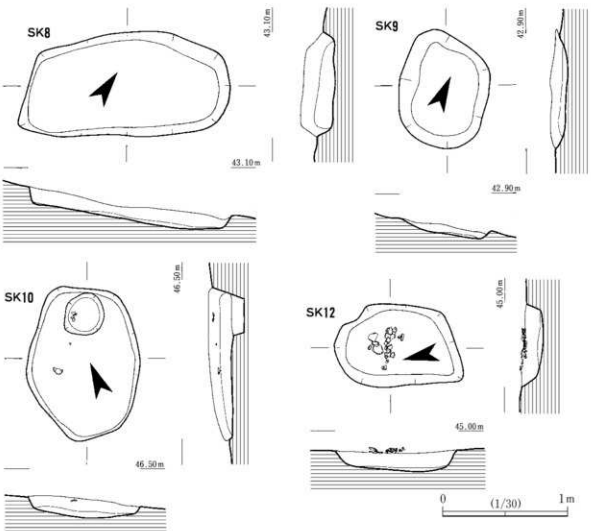


図10　ＳＫ８・９・10・12実測図

ＳＫ13（図11　図版６）　ＳＢ１南西側の緩やかな斜面で検出された不整形土坑である。長径206cm、短径186cm、深さ22cm。埋土は、にぶい黄橙色（10ＹＲ 6/4）砂質土。弥生土器片が出土している。

出土遺物（図12）　22、23は甕形土器の口縁部。22は口縁部屈曲が弱く、先細り状の口唇。23は口唇部を面取りする。24は甕底部。復元底径8.2cmで、外面に刷毛目調整あり。

ＳＫ15（図３　図版７）　ＳＫ２の南西側に位置する小型の長円形の土坑。長径80cm、短径60cm、深さ12cm。埋土は、礫を含むにぶい黄褐色（10ＹＲ 5/3）砂質土の単層。弥生土器片が数点出土した。

ＳＫ16（図13　図版７）　ＳＢ１より南西側に位置する本遺跡最大の土坑である。平面形は不整形で、長径513cm、短径276cm、深さ16cm。中央部に円形のピットが検出された。北側にテラス状の段があり、その部分にＳＫ18が堀り込まれている。埋土は、礫を含む褐色（7.5ＹＲ 4/4）粘質土で、西側部分の下層や壁面で暗赤褐色の焼土が確認された。遺物は、弥生土器が数点出土している。

この土坑の西側は方形を呈し、内から焼土及びピットが検出されていることにより、竪穴住居である可能性も否定できない。今回は、主柱穴及び炉跡が確認できなかったため、土坑として扱うことにした。

ＳＫ17（図３　図版７）

調査区北東で検出された土坑である。長径110cm、短径62cm、深さ11cmで、埋土は、橙(7.5ＹＲ 6/6)粘質土。遺構面と土坑の埋土の違いがはっきりしなかったため、土坑の南東側の平面形及び底部の確定が、困難だった。遺物は出土していない。

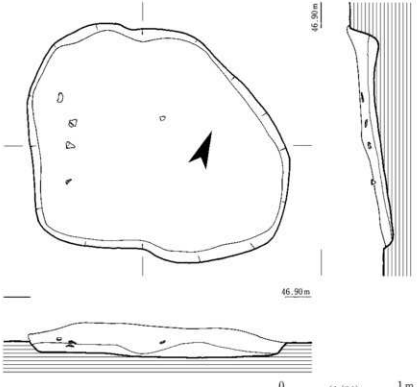


図11　ＳＫ13実測図

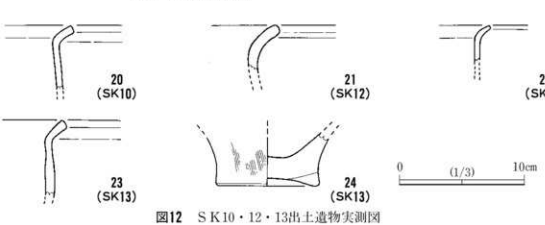


図12　ＳＫ10・12・13出土遺物実測図

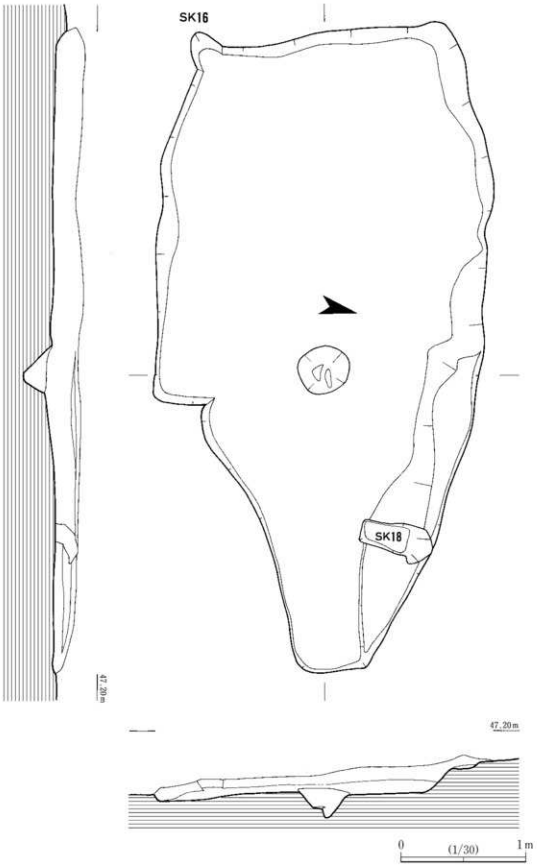


図13　ＳＫ16実測図

ＳＫ18（図14・15　図版６）　ＳＫ18内部に堀り込まれていた土坑である。ＳＫ16を掘り込んだ後に検出したため、南側部分を飛ばしてしまった。残存している状態の長径は115cm、短径は60cm、深さ60cmである。埋土は、にぶい黄褐色（10ＹＲ 4/3）粘質土の単層。大小の青銅製の鈴が１点ずつと、それらの直上から中世の土師坏が３点出土した。長軸方向が真北を向いている点及び出土遺物から中世の墓の可能性も考えられる。

出土遺物（図15　図版17）　25～27は土師器坏である。25･26はいずれも底径5.8cm、27は復元口径12.6cm、器高3.7cm、復元底径5.4cmを測る。３点いずれも底部に回転糸切り痕を残す。

28は青銅鈴である。全長7.4cm、紐高1.3cm、幅5.6cm、器壁の厚みは1.5mm程度である。上面観は八角形を呈し、体部に二条の突帯が巡る。紐の部分と口の部分が平行する形態を呈す。

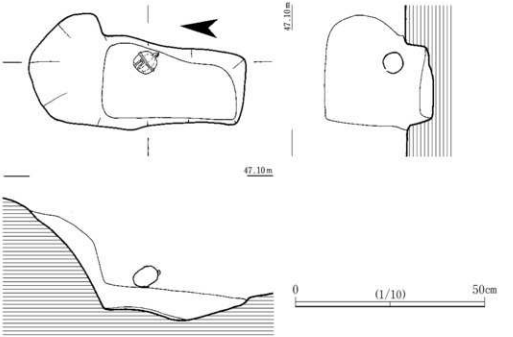


図14　ＳＫ18実測図

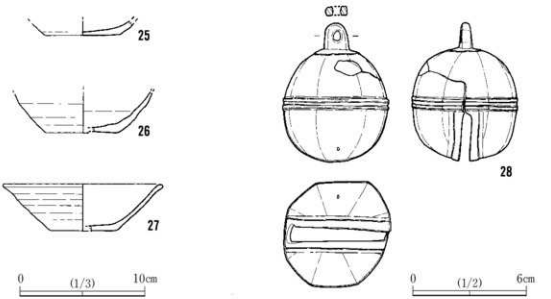


図15　ＳＫ18出土遺物実測図

ＳＫ19（図16　図版７）　調査区中央北西部に位置する。上端が柱穴に切られる。長径87㎝、短径56㎝、深さ11㎝の長円形の土坑。埋土は、にぶい黄橙色（10ＹＲ 6/4）粘質土。遺物は出土しなかった。

ＳＫ20（図16　図版７）　ＳＫ19の北側に位置する土坑で、直径123㎝のほぼ円形をしている。削平により深さが８㎝と浅い。埋土は、にぶい黄橙色（10ＹＲ 4/6）粘質土。遺物は出土していない。

ＳＫ21（図16　図版７）　ＳＫ20の南西に位置する、長径117㎝、短径112㎝、深さ19㎝の不整形の土坑。埋土は、にぶい黄橙色（10ＹＲ 7/4）粘質土の単層で、弥生土器片３点と石斧１点が出土した。

出土遺物（図18　図版18）　29は太形蛤刃石斧で、長さ18.1㎝、幅5.4㎝、残存厚3.8㎝、重量630ｇを測る。全面に研磨が施されており、使用途中に欠損したものである。石材は泥岩であろう。

ＳＫ22（図16　図版７）　ＳＫ21の西側で、ＳＫ19～21と同じレベルで検出された土坑である。削平が著しく、土坑の南側の残りが悪いが、平面形は長円形と推測できる。規模は、長径104㎝、深さは最深部で７㎝。埋土は、にぶい黄橙色（10ＹＲ 6/3）粘質土。弥生土器の小片が出土している。

出土遺物（図18　図版18）　30は壺の胴部。台形状の突帯に横長の刺突文を施している。

ＳＫ23（図16　図版７）　調査区中央部で検出された円形の土坑である。長径182㎝、短径168㎝、深さ18㎝で、底部に６基のピットが堀り込まれていた。ピットの深さは３㎝～25㎝で、中には切り合っているものもある。埋土は、土坑・ピットともにぶい黄褐色（10ＹＲ 5/3）粘質土の単層で、弥生土器片が20数点出土した。

ＳＫ24（図16　図版９）　ＳＫ23の北西に位置する。ＳＫ23と同じレベルから北東へ緩やかに下がる斜面で検出された。不整形の土坑で、長径236㎝、短径109㎝、深さ32㎝の規模である。土坑内に長径75㎝、短径40㎝、深さ16㎝の不整形の掘り込みがあった。埋土は、にぶい黄橙色（10ＹＲ 6/4）粘質土の単層。弥生土器片が数点出土している。

出土遺物（図18　図版18）　31は稜角付突帯を貼付した壺肩部片である。32は壺形土器の底部で、復元底径6.0㎝を測る。平底の形態で、外面には縦方向のヘラミガキと丹塗りの痕跡が若干認められる。いわゆる丹塗磨研の壺であったと考えられる。

ＳＫ26（図17　図版８）　調査区中央部の境界近くで検出された長円形の土坑。規模は、長径266㎝、短径214㎝、深さ６㎝。削平が特に激しく、土坑の底部がわずかに残っている状態だった。埋土は、橙色（7.5ＹＲ 7/6）粘質土の単層。弥生土器が出土したが、削平のため、完形に復元できなかった。

出土遺物（図18　図版18）　33、34は口縁部が「く」の字形に屈曲する甕形土器である。33は復元口径24.8㎝を測る。器面の調整は不明。34は復元口径23.8㎝、残存高12.3㎝を測る。外面には縦方向の刷毛目が顕著に認められる。

35は甕形土器の底部で、復元底径6.8㎝を測る。若干上げ底気味の形態で、調整は不明。

ＳＫ27（図19　図版９）　ＳＫ５とＳＫ11の間に位置する。長円形の土坑で、長径270㎝、短径170㎝、深さ18㎝。土坑の上部が著しい削平を受けて失われていた。埋土は、にぶい黄橙色（10ＹＲ 6/4）粘質土の単層。弥生土器の小片が数点出土した。

ＳＫ29（図19　図版９）　調査区中央北端の調査区界に位置する。全体像は不明であるが、不整形の隅丸長方形であると推測する。規模は、東西方向が177㎝、南北方向は不明、深さは12㎝。ＳＤ６を切り、小型のピットに切られる。埋土は、にぶい黄褐色（10ＹＲ 5/3）。弥生土器片が出土している。

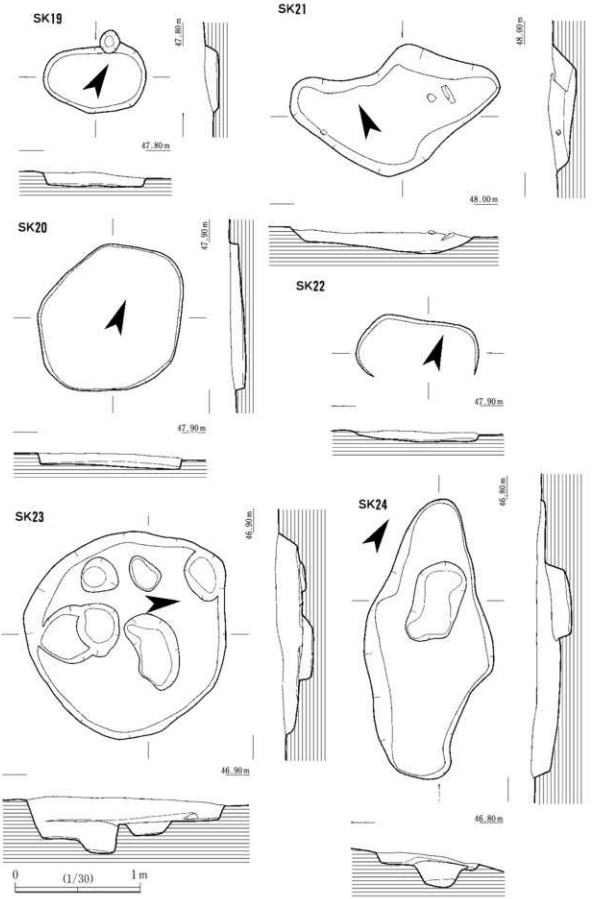


図16　ＳＫ19・20・21・22・23・24実測図

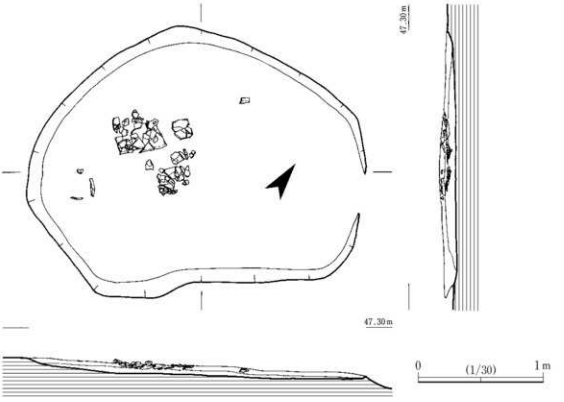


図17　ＳＫ26実測図

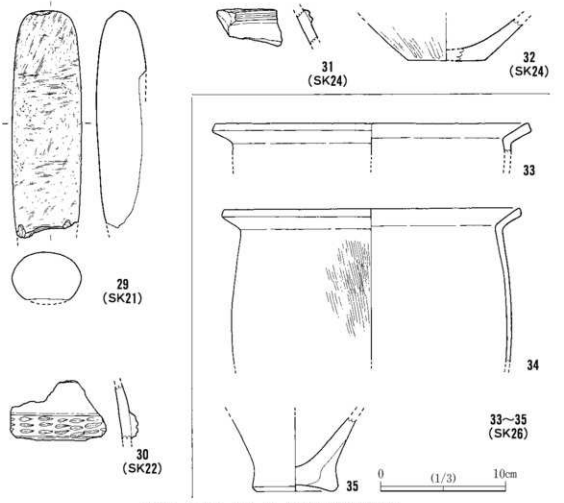


図18　ＳＫ21・22・24・26出土遺物実測図

出土遺物（図20　図版18）　36、37はいわゆる跳ね上げ口縁を呈する甕破片である。38は甕形土器の底部で、復元底径3.8cmを測る。39は鋤先口縁を呈する壺形土器で、復元口径22.4cmを測る。口縁部上面に円形浮文が貼付されている。

ＳＫ30（図21　図版９）　ＳＫ29の南側で、ＳＤ６を切る状態で検出された長円形の土坑である。規模は、長径81cm、短径60cm、深さ10cmで、土坑中にピットが掘り込まれている。埋土は、にぶい黄褐色（10ＹＲ 5/4）粘質土の単層で、弥生土器片が３点出土している。

ＳＫ31（図21　図版９）　ＳＫ26の西側に位置する。ＳＫ26同様、上面が削平されている。長径120cm、短径94cm、深さ12cmの長円形の土坑である。埋土は、にぶい褐色（7.5ＹＲ 5/4）粘質土の単層。遺物は、弥生土器片が１点のみ出土した。

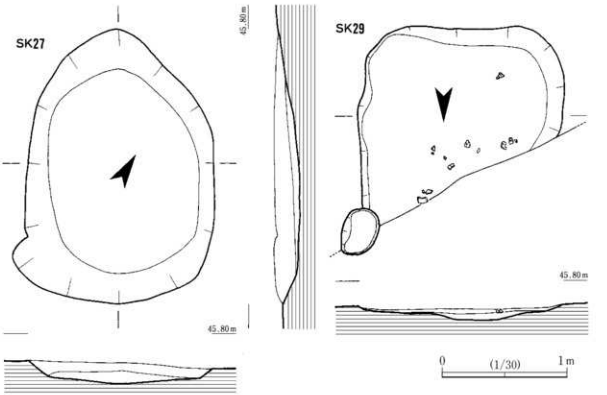


図19　ＳＫ27・29実測図

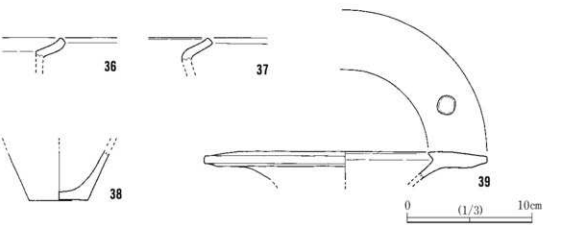


図20　ＳＫ29出土遺物実測図

ＳＫ32（図３　図版11）　調査区中央部、ＳＢ２の南側に位置する。ＳＫ25及びＳＤ６に切られ、ＳＫ33を切る状態で検出された。長径286㎝、短径158㎝、深さ15㎝の比較的大きい長円形の土坑である。埋土は、明黄褐色（10ＹＲ 7/4）粘質土の単層で、弥生土器の小片が20数点出土した。

ＳＫ33（図21　図版10・11）　ＳＢ２の南側で検出された。ＳＫ33、ＳＫ25、ＳＤ６に切られてはいるが、長円形の大型の土坑である。長径344㎝、推定の短径180㎝（現存150㎝）、深さ27㎝の規模をもつ。埋土は、にぶい黄褐色（10ＹＲ 5/4）粘質土の単層で、弥生土器片、石斧、石包丁、砥石、石器の剥片や原石などの遺物が多数出土した。これらの遺物は、床面直上ではなく埋土中より出土していることから、廃棄土坑であると考えられる。本遺跡の性格を考える上で、重要な土坑である。

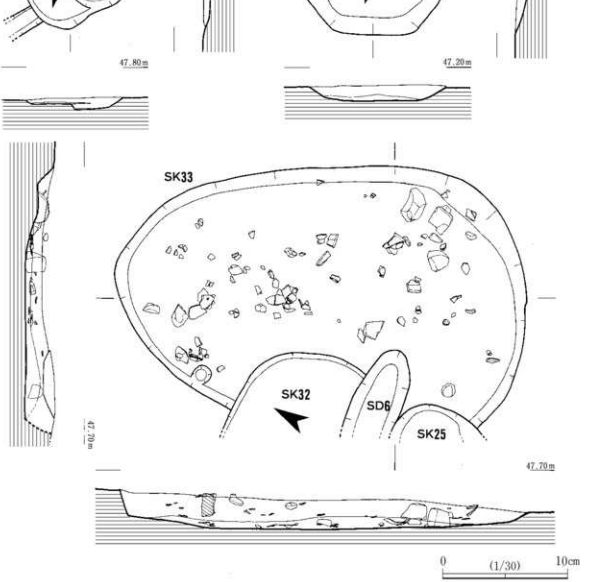


図21　ＳＫ30・31・33実測図

出土遺物（図22・23・24　図版19・20）

弥生土器

40は稜角付突帯が貼り付けられた壺肩部である。外面はナデによる調整で丁寧に仕上げられている。41は口縁部が強く「く」の字形に屈曲する甕形土器で、内外面ともにナデによって仕上げられている。42は口縁部が強く外反し、内端部を跳ね上げる甕形土器である。復元口径21.8cmを測るが、小破片のため、復元径に若干の疑問がある。器面の荒れがはげしいため、内外面ともに調整は不明である。43は鋤先口縁を呈する甕形土器である。口縁部内面の突出は顕著ではなく、発達した鋤先口縁ではない。全体的に器壁が厚く、しっかりとした作りである。復元口径23.2cm、残存高15.7cmを測る。外面には縦方向の刷毛目が顕著に認められ、内面は丁寧なナデによって仕上げられている。44は鉢形土器で、復元口径13.4cm、器高8.7cm、底径6.6cmを測る。器面の荒れがはげしいため、調整は不明。45～50は甕形土器の底部である。いずれも器壁は中厚で、若干上げ底気味である。底径は45が6.0cm（復元）、46が6.4cm、47が7.4cm（復元）、48が6.2cm（復元）、49が5.8cmを測る。51は広口壺である。頸部はラッパ状に外反し、口縁端部に面取りをしっかり行っている。復元口径25.6cm、残存高5.7cmを測る。器面が荒れており、内外面ともに調整不明である。52は壺形土器の底部で、復元底径7.0cm、残存高12.7cmを測る。器壁は薄く仕上げられており、外面にはミガキ調整の痕跡がわずかではあるが認められる。

石器

53～55は石器製作の際生じた剥片で、土坑埋土をフルイにかけた際発見された。53は長さ2.2cm、幅2.1cm、厚さ0.4cm、重量1.5gを測る。背面には打面を約180°転移した剥離痕が認められる。石材は泥岩。54は長さ2.8cm、幅2.3cm、厚さ0.9cm、重量7.2gを測る。背面にはやはり打面をおよそ180°転移した剥離痕が残されている。石材は泥岩と考えられる。55は長さ3.7cm、幅4.3cm、厚さ0.7cm、重量9.6gを測る。石材は玄武岩である。これらの剥片は、いずれも不定形で、規則的な剥片剥離技術から生じたものではない。おそらく石斧製作の成形剥離の段階で生じた剥片であろう。56は縦長剥片の縁辺部（図の正面で言えば下縁部にあたる）に使用痕跡が認められるもので、とりあえず不定形刃器としてとらえておきたい。長さ6.7cm、幅11.0cm、厚さ1.3cm、重量138gを測る。石材は泥岩である。57は長さ8.3cm、幅12.8cm、厚さ1.6cm、重量160gを測る。石包丁の未製品とした場合、紐通しの孔が厚みがありすぎる段階で穿たれており、形状も整っていない。しかし他に考えられる器種がないので、とりあえず石包丁の未製品として報告する。58は楔形石器として考えている。敲打中に折損したため刃部を再生し、楔として使用したものであろう。下端部に顕著な階段状の剥離痕が残されている。長さ9.6cm、幅6.7cm、厚さ4.5cm、重量480gを測り、泥岩製である。

59は砥石である。正面の大部分と裏面のごく一部に研磨面が認められ、正面は研磨作業によって若干くぼんでおり、線状のキズが顕著に認められる。残存長18.3cm、幅20.0cm、厚さ8.2cm、重量4,480gを測る。サイズの大きさや広い砥面をもつことから、石器の整形研磨に用いられたものとして考えられる。石材は砂岩を使用している。なお、同遺構からは砂岩の自然礫が数個体出土しているが、こうした自然礫は遺跡の基盤層には含まれていない。つまりこのような砂岩礫は砥石として使用するために他の場所から集落内に持ち込まれたものであろう。

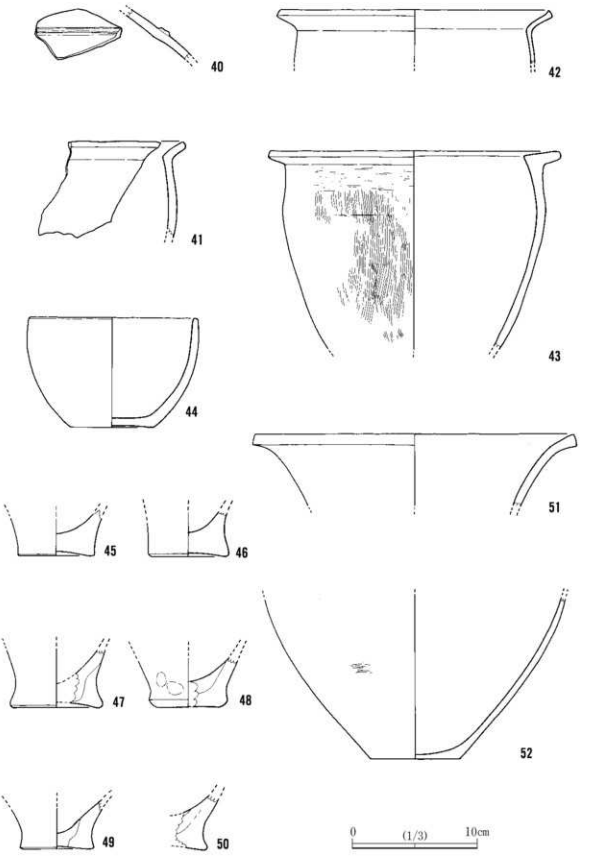


図22　ＳＫ33出土遺物実測図(1)

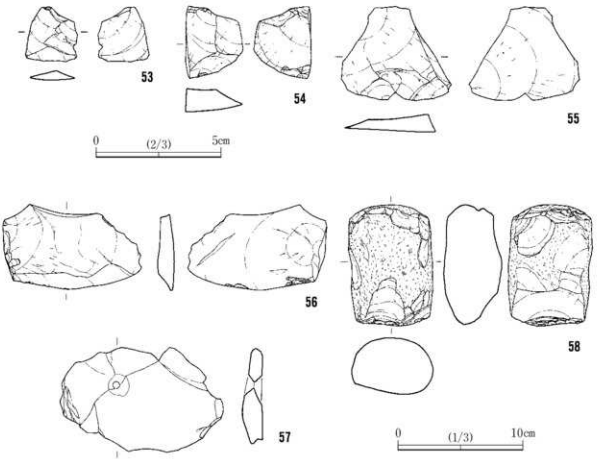
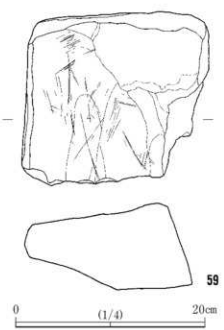


図23　ＳＫ33出土遺物実測図(2)



第24図　ＳＫ33出土遺物実測図(3)

ＳＫ33からは上述したような、石器の未製品や剥片、遺跡外から持ち込まれた自然石が多数出土している。こうしたことから集落内で石器の製作が行われ、その残滓が一括して廃棄された状況を読みとることができる。そしてその時期は43のような土器が出土していることから、中期前葉頃と考えることができよう。

ＳＫ35（図３　図版９）　調査区北側の谷筋に位置する。北側の遺物包含層に堀り込まれた、不整形の土坑である。規模は、長径174㎝、短径140、深さ50㎝で、土坑の上面から約20㎝のところにテラス状の段があり、段から下は、直径約120㎝の円形をしている。埋土は、灰黄褐色（10ＹＲ 5/2）粘質土の単層。遺物は出土していない。堀り込む途中で腐敗しきっていない木の根が出ていることなどから、樹根もしくは、近代の撹乱の可能性もある。

ＳＫ36（図25　図版９）　ＳＢ２の南西側、調査区境界付近に位置する円形の土坑である。規模は、長径90cm、短径77cm、深さ５cmと小振りで、削平が著しい。埋土は、にぶい橙色（7.5Ｙ Ｒ 6/4）粘質土の単層。遺物は弥生土器片が１点出土したのみである。

ＳＫ37（図26　図版９）　ＳＫ23の北西側に位置する不整形の土坑である。ＳＫ24同様、平坦面から北東側に下がる斜面で検出された。斜面に掘り込まれたためか、土坑の床面が斜めに掘り込まれている。削平により北側の一部が失われているが、長径195cm、短径122cm、深さ14cmの規模をもつ。埋土は、明黄褐色（10Ｙ Ｒ 6/6）粘質土の単層。弥生時代中期に属する土器の壺や甕と思われる破片が、埋土中や土坑の底部直上から自然石と共に出土している。

出土遺物（図27　図版19・20）　60は口縁部が「く」の字形に屈曲し、頸部に断面三角形状の突帯を貼り付けている。内外面ともナデ調整。

61、62は甕形土器の底部。61は分厚い器壁で、若干上げ底状を呈す。復元底形5.3cm。62は中厚の器壁で、若干上げ底である。底径6.5cmを測る。

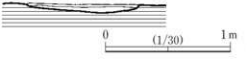


図25　ＳＫ36実測図

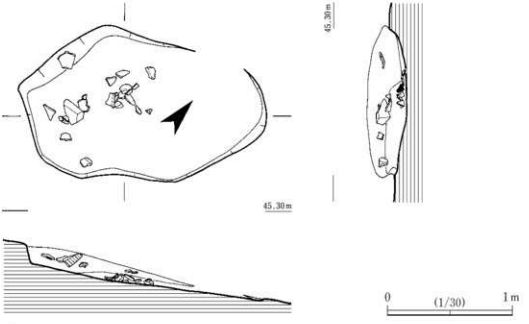


図26　ＳＫ37実測図

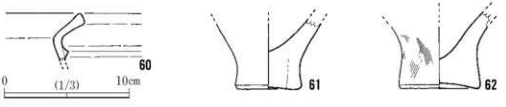


図27　ＳＫ37出土遺物実測図

ＳＫ38（図３）　調査区北西の谷筋に当たる、本遺跡の中でも標高の低い位置で検出した。調査区境界の法面に切られて、遺構の全容は不明であるが、直径52cm程度の円形の土坑と推測する。埋土は、灰黄褐色（10Ｙ Ｒ 6/2）粘質土の単層で、遺物は出土していない。

ＳＫ39（図28　図版11）　調査区北西端に近い地点の南に向かう緩やかな傾斜面で検出された。長径116cm、短径57cm、深さ６cmの不整形の土坑で、土坑底部に、深さ10cmのピットが掘り込まれている。埋土は、にぶい褐色（7.5Ｙ Ｒ 5/4）粘質土の単層。弥生土器片が数点出土している。

ＳＫ40（図28　図版11）　ＳＫ39の南側に位置する。長径120cm、短径90cm、深さ14cmの規模をもつ不整形の土坑である。埋土は、灰褐色（10Ｙ Ｒ 4/1）粘質土の単層。遺物は出土しなかった。

ＳＫ41（図３　図版11）　調査区の北東端に近い谷筋に当たる地点で検出された。長径107cm、短径81cm、深さ22cmの長円形の土坑。埋土は、にぶい黄橙色（10Ｙ Ｒ 6/3）砂質土で、小粒の礫を含む単層。遺物は、弥生土器の小片が数点出土したのみである。

ＳＫ42（図28）　ＳＫ41の南西に位置する。長径92cm、短径75cm、深さ42cmの規模をもつ長円形の土坑。埋土は、にぶい黄橙色（10Ｙ Ｒ 5/3）粘質土の単層。弥生土器片が数点出土している。

出土遺物（図28）　63は鋤先口縁を呈する壺の小破片である。内面の突出は弱い。64、65は垂下口縁壺の小破片である。64は口縁部の垂れ下がりはごくわずかで、口唇部も欠損している。内外面ともにナデ調整。65は若干口縁部が垂れ下がる。内外面とも刷毛目のちナデている。

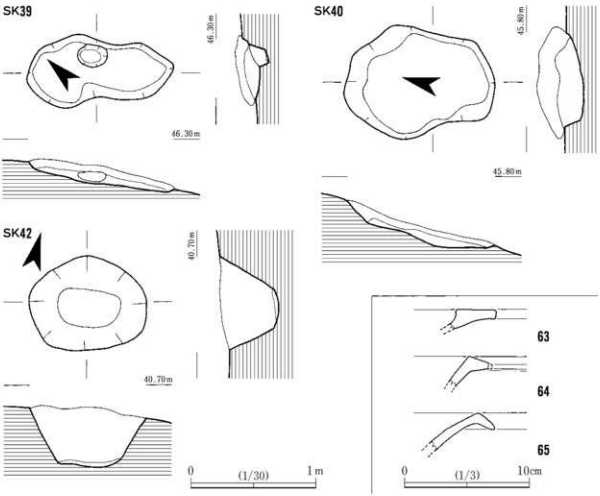


図28　ＳＫ39・40・42実測図・ＳＫ42出土遺物実測図

ＳＫ43（図３）　調査区北西端に位置し、ＳＫ41、ＳＫ42と同じレベルで検出された小型の土坑である。調査区境の法面で切られているが、直径38㎝、深さ27㎝の円形土坑であると推測できた。埋土は、明黄褐色（10Ｙ Ｒ 6/6）粘質土の単層。弥生土器片が数点出土している。

ＳＫ44（図３）　ＳＫ43のそばから検出された。ＳＫ43同様、法面で切られているが、直径36㎝、深さ23㎝の円形と推測できる土坑である。埋土はＳＫ43と同じで、弥生土器片が１点出土した。

ＳＫ45（図３　図版５）　調査区北東の谷筋の始まり付近で検出された円形の土坑である。規模は、直径120㎝、深さ18㎝。埋土は、黄灰色（2.5Ｙ Ｒ 6/1）粘質土の単層で、遺物は出土しなかった。

ＳＫ45は、土色や埋土の堆積状況がＳＫ35とよく似ており、堀り込む途中で木の根が出ていることなどから、樹根もしくは、近代の撹乱の可能性もある。

(3) 焼土坑

今回の調査では、焼土坑が４基確認された。他の土坑と同様に、上面は畑作利用のための削平を受けていたが、底部は比較的よく残っていた。４基の焼土坑はどれも、壁面にシルトに近い粘質土（以下、粘土とする）が張られており、それが被熱によって硬化し、赤褐色に変化していた。底部には、粘土のようなものは張られていなかったものの、被熱により固く焼けしまっていた。埋土は、木片などの炭化物の小片を多く含んでいるが、時期を特定できるような遺物は出土していない。ただ、弥生時代の遺構を切っている例もあることから、古墳時代以降の可能性もある。

以上のことから、４基の焼土坑は、何らかの焼成を行った窯及び火葬施設の可能性があるが、はっきりした用途は不明である。以下それぞれの焼土坑について述べる。

ＳＫ14（図29　図版12）　調査区北東側の丘陵部に位置する。長径120㎝、短径98㎝、深さ24㎝の長円形の土坑。第１層は礫を含む褐色土で、第２層は炭化物を多く含む黒褐色土。壁面は、固く焼け締まった粘土層で、にぶい赤褐色。第２層の下部は、被熱を受けていた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ25（図29　図版12）　調査区中央部に位置する。ＳＫ32・ＳＫ33・ＳＤ６を切る長円形の土坑で（図31参照）、規模は、長径91㎝、短径68㎝、深さ33㎝。第１層は褐色土、第２層は炭化物を多く含む黒色土。壁面は橙色の粘土層で、被熱により硬化していた。被熱の受け方の違いからか、場所によっては暗赤褐色（2.5Ｙ Ｒ 3/6）の部分もあった。床面も被熱を受けていた。遺物は出土していない。

ＳＫ28（図29　図版12）　調査区南西部の北西から南東方向へ下る斜面上に位置する。周辺には遺構はなく、この土坑単体で存在する。長円形の土坑で、長径93㎝、短径72㎝、深さ17㎝の規模をもつ。埋土は、第１層が褐色の粘質土で、第２層が少量の炭化物を含む黒色土。壁面は、被熱を受けて明赤褐色の硬化した粘土層。強い熱のためか、極暗赤褐色（10Ｒ 2/3）に変化している部分もあった。上部が強く削平されているため、壁面の粘土層の残りはあまりよくなかった。遺物は出土していない。

ＳＫ34（図29　図版12）　ＳＢ３内に掘り込まれている長円形の土坑である。長径85㎝、短径71㎝、深さ25㎝の規模をもつ。埋土は、第１層が炭化物を含む暗褐色粘質土、第２層が多量の炭化物を含む黒褐色粘質土。壁面は被熱により硬化した橙色の粘土層で、部分的に赤褐色（2.5Ｙ Ｒ 4/6）に変色していた。この土坑は壁面の残りがよく、粘土層が壁面全体を覆っていたことがよく観察できた。他の焼土坑同様、土坑の床面も被熱を受けていた。姫島産黒曜石の剥片が１点出土している。

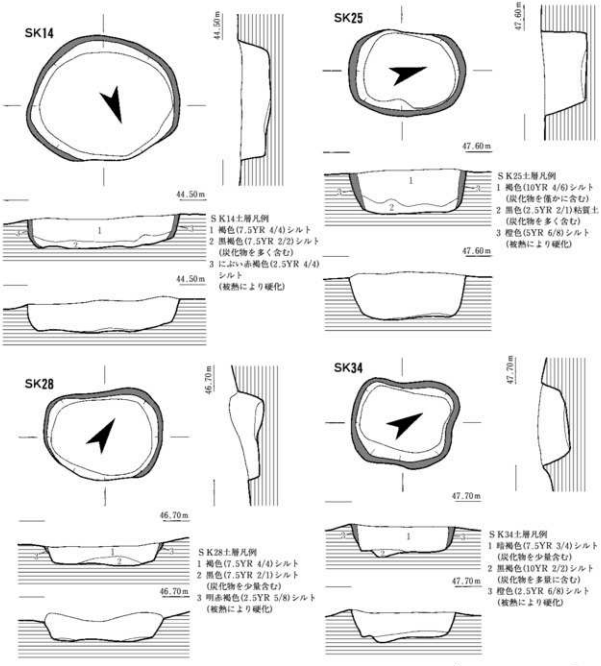


図29　S K14・25・28・34実測図

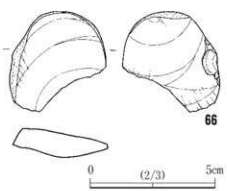


図30　S K34出土遺物実測図

S K34出土遺物（図30　図版19）　66は姫島産黒曜石の剥片。表面は１枚の剥離面が認められ、裏面には主要剥離面が大きく残る。右側縁に二次的な剥離痕があるが、これは二次加工ではなく、剥離の衝撃によるものであろう。自然面の状況から円礫を分割したものと考えられる。長さ4.0cm、幅3.8cm、厚さ1.0cm、重量12.1ｇを測る。

(4)　溝

調査区内で８条の溝が検出された。最長はＳＤ５の12ｍ、

最短はＳＤ２の２ｍである。ＳＤ１～７の深さは３㎝～５㎝と浅く、ＳＤ８は最深部で45㎝であった。ＳＤ１・３・４・５は、埋土から、近代もしくは現代の暗渠の可能性も否定できない。ＳＤ７・ＳＤ８は、底部の形状から、雨水によって削られた痕跡とも考えられる。ＳＤ２は、土坑と埋土が酷似していることから、弥生時代のものと推定できる。いずれの溝も、性格は不明である。

ＳＤ６（図31　図版11）

調査区中央部に位置し、ＳＫ32・33を切り、ＳＫ29・30の２基のピットに切られる。長さ約７ｍ、幅約20～45㎝、最深部で10㎝。埋土は、にぶい黄褐色（10ＹＲ 5/3）の単層。弥生土器片が出土した。

出土遺物（図32　図版19・21）　67は甕形土器である。底部は薄く、外側に張り出す。底径7.8㎝、残存高11.0㎝を測る。外面には刷毛目調整あり。68は壺形土器で、底径8.8㎝、残存高14.0㎝を測る。全体的に厚い作りで、底部内外面に指押さえ痕が残る。

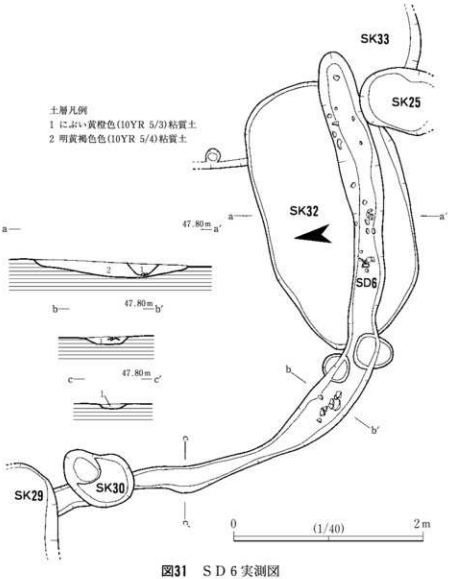


図31　ＳＤ６実測図

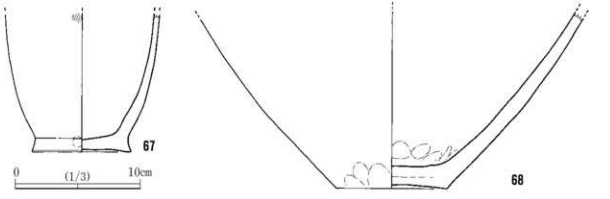


図32　ＳＤ６出土遺物実測図

(5) 不明遺構

不明遺構は、調査区内の様々な地点で２*基検出された。以下、主な遺構２基について説明する。

ＳＸ１（図33　図版13）　調査区北西部に位置する。遺物包含層の堆積状況をトレンチで確認した際、遺構の断面が出現したため、平面形を確認した後、掘り込みを始めた。最終的には、長径210cm、短径95cm、深さ48cmの規模で、東側が長方形、西側が長円形を呈し、全体としては、不整長方形の土坑であることが確認できた。埋土は黄灰色（2.5ＹＲ 6/1）粘質土の単層で、土師器の甕が１点、土坑の東端と西端に分かれて出土している。縦方向に割れた甕が東西に分けるようにして出土している点と、土坑の形状から、土坑墓の可能性も否定できない。

出土遺物（図34　図版20）　69は土師器甕で、ほぼ完形に復元できる。口径25.2cm、器高23.5cmを測る。外面刷毛目、内面ナデ調整。平安時代の所産であろうか。

ＳＸ２（図35　図版14）　調査区南西に位置する。森林伐採時の仮設道により削平されているため遺構の全容は不明。残存する規模は、長径370cm、短径130cm、深さ63cmである。埋土は、明黄褐色（10ＹＲ 6/6）砂質土の単層で、褐鉄鋼が、底部付近で層状に検出された。弥生土器が出土した。

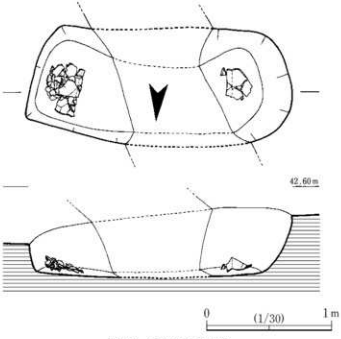


図33　ＳＸ１実測図

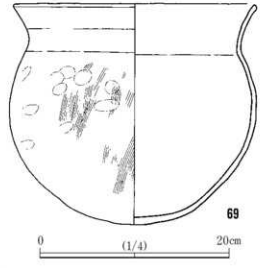


図34　ＳＸ１出土遺物実測図

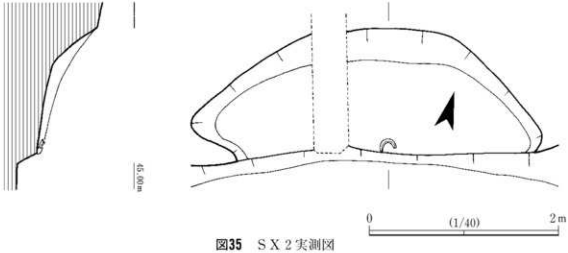


図35　ＳＸ２実測図

出土遺物（図36　図版21）　70は甕形土器で、長胴形を呈するものであろう。復元口径17.4cm、残存高10.5cmを測る。胴部が強く張り出す形態で、外面は刷毛目調整が顕著である。

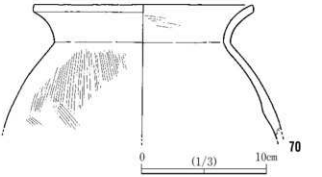


図36　ＳＸ２出土遺物実測図

(6)　柱穴

柱穴は全体で140基検出された(直径５cm程度の杭穴と思われるものも含む)。調査区北西では、暗灰色（N3/　）粘質土のピットが多数検出された。これらは、形状、埋土から、近代のイモ穴跡であると判断した。

ＳＰ21（図37　図版12）　ＳＫ27の東に位置する。長径74cm、短径63cm、深さ60cmの長円形である。弥生土器の底部が出土した。

出土遺物（図38　図版21）　71は甕の底部で、底径7.2cmを測る。外面に刷毛目調整を施している。

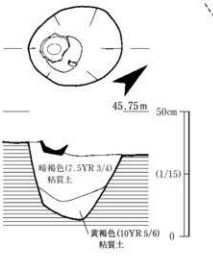


図37　ＳＰ21実測図

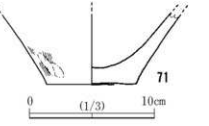


図38　ＳＰ21出土遺物実測図

ＳＰ33　ＳＫ45北側で検出した近代のイモ穴である。直径45cm、深さ40cm。石器が１点出土した。

出土遺物（図39　図版21）　72は太形蛤刃石斧の欠損品であるが、下縁部の一部を研ぎ直し、刃部再生を行っている。長さ8.2cm、幅7.0cm、厚さ5.3cm、重量610ｇを測る。敲打調整中に欠損したため、研磨を施して刃部を作出し、斧以外の用途で用いたものであろう。

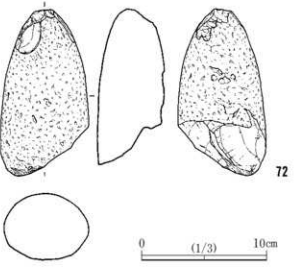


図39　ＳＰ33出土遺物実測図

2　遺物包含層の調査

遺物包含層は、調査区の南西側と、北端部で確認された（図３　図版14･15参照）。以下、説明上南西側を南側包含層、北端を北側包含層として説明を加えたい。

南側包含層にはトレンチを設定したが、その土層断面図を図40に示している。丘陵斜面に平行するような堆積で、第１層は黄灰色砂質土、第２層はにぶい黄橙色砂質土、第３層はにぶい橙色砂質土、第４層は明褐色砂質土となっている。このうち最も多く遺物が出土したのは第１層であり、場所によっては遺物が密集するような状態で出土した。第２層では、その上部で遺物がわずかに出土したのみであり、第３層、第４層からは遺物はまったく出土しなかった。こうしたことから遺物包含層として捉えられるのは第１層ということになる。

北側包含層は丘陵の谷部に平均10cm程度の厚さで堆積していた。この包含層は中世の不明遺構であるＳＸ１によって切られており、出土遺物からも弥生時代に形成されたことが確実である。

以下、各包含層出土の土器について述べてみたい。

(1)　南側包含層出土遺物

縄文土器（図41　図版20）

73は縄文時代晩期の浅鉢で、胴部復元径は22.2cmである。所謂黒色磨研土器であり、内外面ともに丁寧なミガキが施されている。胎土も精良で、砂粒を若干含んでいる。口縁部を欠損しているため断定はできないが、おそらく晩期中葉の所産であろう。

弥生土器（図41･42　図版20・21・22・23）

74～82は壺形土器の口縁部である。74は鋤先口縁の初源的な形態を呈するもので、復元口径21.2cmを測る。厚手のしっかりした器壁で、外面にはヘラミガキ調整が施されている。胎土に砂粒を若干含み、焼成は良好。78、79も同様の口縁部形態である。

75は口縁部内面に立ち上がりをもつ「内接口縁」のタイプで、口縁部外面に二枚貝による文様を施

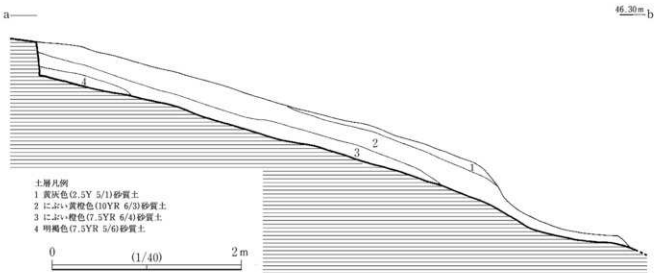


図40　調査区南側包含層土層実測図

している。砂粒を若干含み、焼成は普通である。

76は垂下口縁の初源的なタイプと考えられるもので、復元口径10.0cmを測る。頸部外面には刷毛目調整の跡が認められるが、ナデによって部分的に消されており、内面は丁寧にナデられている。これよりもやや発達した口縁形態を示すものとして82がある。斜め下方に垂れる口縁部外面にヘラによる山形文様が施されている。いずれも胎土に砂粒を多く含み、焼成は普通である。

77は素口縁のタイプで、口縁部先端付近で強く外反する形態である。外面はナデ、内面はミガキにより仕上げており、胎土に砂粒を若干含む。

これと同じく81も素口縁の形態であるが、口縁内端部を若干肥厚させている。外面は刷毛目調整ののちナデ、内面はナデによって仕上げられている。胎土に砂粒を若干含み、焼成は普通。

80は口縁部外面に突帯を貼り付けたもので、珍しい形態である。内面には横方向の刷毛目調整が施されている。胎土に砂粒を少量含み、焼成は普通である。

83～86は壺形土器の肩部もしくは胴部である。83は三角形の突帯を二条貼り付けたもので、胴部の復元径は31.8cmである。外面には丁寧なヘラミガキが施されている。胎土には砂粒が若干含まれているが精良で、焼成も良好である。84は頸部と胴部の境界に三条の沈線が施され、山形文の痕跡も若干認められる。胎土に砂粒を多く含み、焼成は普通。85は櫛描きによる波状文と直線文が施された個体であり、内外面とも丁寧にナデられている。胎土に砂粒を若干含み、焼成は普通である。86は断面形態が台形状の突帯が貼り付けられたもので、器壁も分厚い。胎土に砂粒を少量含み、焼成は普通である。弥生後期の大型壺である可能性が強い。

87は壺形土器の底部である。底径7.6cm、残存高13.9cmを測る。上げ底で、器壁が分厚い。外面はヘラミガキとナデの痕跡が認められるが、内面は剥落しており、調整不明である。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好である。

88～96は口縁部が「く」の字形に屈曲する甕形土器。89、95は口縁部内面端部を肥厚させる跳ね上げ口縁のタイプである。89は口唇部外面をしっかり面取りしている個体で、胎土に砂粒を若干含み、焼成は普通。95は復元口径24.4cm、残存高6.7cmを測り、外面には刷毛目調整痕が若干残る。胎土に含まれる砂粒は少量で、焼成は普通。その他のものは小片であり、不確実ではあるけれども、胴部が張るタイプ（90、93、94、95）と張らないタイプ（88、91、92）に分類できると考えられる。88は口縁部全体が厚手に作られたもので、外面には刷毛目調整が認められる。砂粒を若干含み、焼成は良好である。90は口縁部が強く「く」の字に屈曲するもので、外面には縦方向の、内面には横方向の刷毛目調整痕が明瞭に認められる。胎土に砂粒を若干含み、焼成は普通である。91は器壁が薄く仕上げられたもので、外面は刷毛目調整ののちナデ、内面はナデによって仕上げられている。胎土に砂粒を若干含み、焼成は普通。92は口縁部が大きくラッパ状に開く形態で、口縁部内面には横方向の刷毛目痕が認められる。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。93は口唇部をしっかり面取りしており、外面には刷毛目調整が若干認められる。胎土に砂粒を多く含み、焼成は普通。94は口縁部が強く「く」の字状に屈曲する形態で、器面調整は不明。胎土に砂粒を若干含み、焼成は普通である。96は短い口縁部が強く「く」の字状に屈曲する形態で、外面には刷毛目調整が明瞭に認められる。胎土に砂粒を多く含み、焼成は普通である。

97は鉢形土器で、口縁部を肥厚させている。胎土に砂粒を若干含み、焼成は普通。

98は甕形土器の胴部片で、器壁が薄く、丁寧なつくりである。稜角付の突帯が貼付されている。胎土に含まれる砂粒は少なく、焼成は普通である。

99～110は甕形土器の底部である。器壁が分厚く、平底もしくは若干上げ底状のもの（100、102、103、105～109）が大半であり、その他には円筒状で、器壁が極端に分厚いもの（99）、凸レンズ状のもの（101）、平底で器壁が薄いもの（104）、同じく器壁が薄く、高台状を呈するもの（110）がある。底径は99が6.9cm、100が10.2cm、101が8.0cm（復元径）、102が9.5cm、103が7.6cm、104が6.6cm（復元径）、105が7.3cm、106が6.8cm（復元径）、107が7.4cm、108が8.0cm（復元径）、109が7.6cm、110が7.4cm（復元径）を測る。凸レンズ状底部の101は後期中葉以降、その他のものは中期前葉～中葉の所産であると考えられる。

石器（図43　図版23）

111～113は太型蛤刃石斧である。111は残存長13.3cm、幅5.7cm、厚さ4.3cm、重量520ｇを測る。敲打痕が顕著にみられるが、ミガキの痕ははっきりと認められないことから、敲打調整段階で折損し、放棄されたものと思われる。石材は安山岩。112は残存長14.1cm、幅5.2cm、厚さ3.6cm、重量380ｇを測る。大きく欠損している個体で、ミガキ痕が顕著に認められる。完形品であったものが使用途中に折損したものであろう。石材は泥岩である。113は長さ11.9cm、幅6.1cm、厚さ4.9cm、重量740ｇを測る。成形剥離、敲打、ミガキ痕が認められるが、ミガキ痕は部分的に認められるにすぎないため、この段階で製作が放棄されたものと考えられる。断面形をみると円筒形を呈しており、伐採斧としての機能を十分に満たしうる個体であったと考えられるが、何故製作途中で放棄されたのか不明である。石材は安山岩である。

114は敲石である。長さ4.9cm、幅3.7cm、厚さ2.8cm、重量71ｇを測る。自然石の縁辺部が潰れたものであり、石器製作に関連する敲石であると考えた。石材は花崗岩である。

115は石器製作の成形時に生じた剥片で長さ5.1cm、幅10.2cm、厚さ1.8cm、重量86ｇを測る。横長の剥片で、背面には打面をおよそ180°転移した剥離痕が認められる。この剥片を剥出する以前に、数回の成形剥離が行われたことがうかがえる。石材は泥岩である。

その他の遺物（図43　図版23・24）

116は須恵器大甕の肩部片である。外面にはタタキ痕、内面にはヘラによるケズリの痕が認められ、外面には自然釉が施されている。胎土には砂粒を若干含み、焼成は良好である。

117は肥前磁器の底部で、底部復元径8.2cmを測る。見込み部分に五弁花のコンニャク印判が付されている。

118は近代（明治期）の醤油瓶で、底径10.6cm、残存高19.5cmを測る。外面の表と裏に鉄釉で文字が書かれており、表面は「田部」と判読できるが、裏面については不明。聞き取り調査によって町内で醤油醸造を行っている吉富家で明治期に使用されていた瓶であることが判明した。

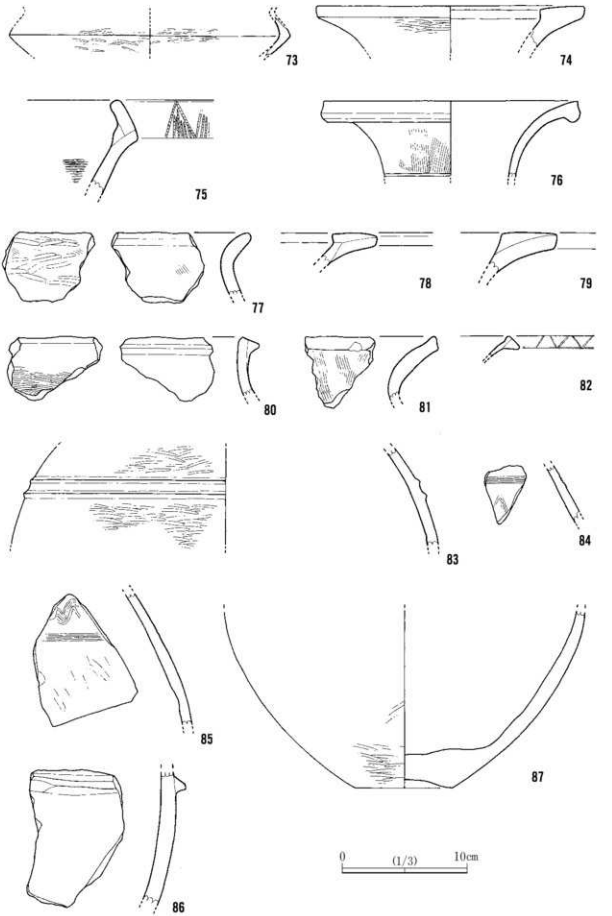


図41　調査区南側包含層出土遺物実測図(1)

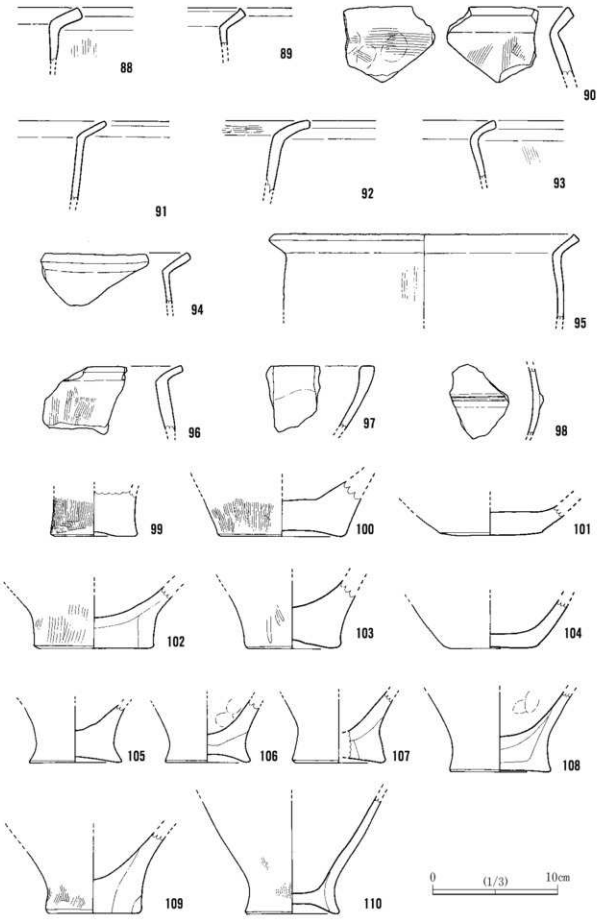


図42　調査区南側包含層出土遺物実測図(2)

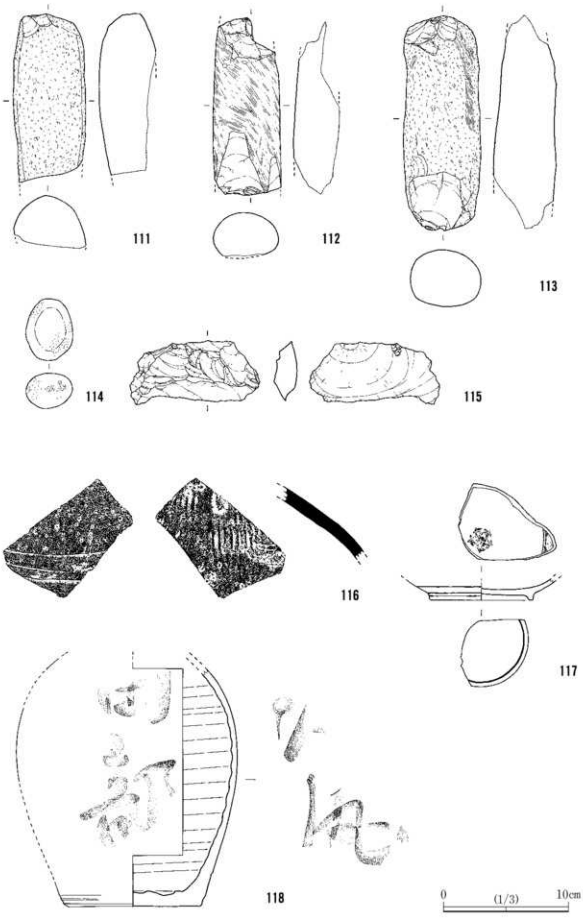


図43　調査区南側包含層出土遺物実測図(3)

(2) 北側包含層出土遺物

弥生土器

119～123は、甕形土器の口縁部である。119は口縁部が「く」の字に外反し、胴部が張る形態である。外面には刷毛目調整、内面にはナデの痕跡が認められる。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好である。120も同様の形態を呈するもので、内外面の調整はナデである。胎土には砂粒を多く含んでおり、焼成は良好。121は鋤先口縁を呈するもので、頸部には断面三角形の突帯を貼付している。内外面ともに丁寧なナデ調整によって仕上げられている。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。122、123は跳ね上げ口縁を呈するものであり、122は胴部が若干張る形態であろう。

124は壺形土器の頸部である。高く突出する断面台形状の突帯に刻目を施したものであり、外面には刷毛目調整の痕跡が認められる。胎土に含まれる砂粒は少量であり、焼成は良好。

125～127は壺形土器の口縁部である。125は内接口縁を呈するもので、口縁部外面にヘラ状工具による山形文が施されている。外面は刷毛目のちナデ、内面はナデによって仕上げられている。胎土に砂粒を若干含み、焼成は普通である。126は垂下口縁を呈するもので、復元口径18.5cmを測る。口縁部外面には板状の工具によって押圧された山形文が施されている。内外面ともに丁寧なナデ調整により仕上げられており、胎土には砂粒を若干含み、焼成は良好である。127は広口壺に属するもので、口縁端部を肥厚させ、三角形状に仕上げる。復元口径24.8cm、残存高6.4cmを測る。器面の荒れが著しく、調整は不明瞭であるが、内面にはナデ調整の痕が認められる。胎土には砂粒を少量含み、焼成は良好である。

128～133は甕形土器の底部である。器壁が分厚く、若干上げ底気味のもの（128、129、131、133）と、器壁が薄く、若干上げ底気味のもの(130、132)に分類可能である。底径は128が6.3cm、129が7.0cm、130は7.0cm、131は5.8cm（復元径）、132は7.6cm（復元径）、133は6.8cmを測る。

134～136は壺形土器の底部である。134は復元底径17.0cm、残存高6.2cmを測る。高台状に突出する底部形態である。135は復元底径9.4cm、残存高6.1cmを測る。器壁は厚く、内面には指ナデ調整の痕が顕著に認められる。136は復元底径19.8cm、残存高6.2cmを測り、かなり大型の壺底部である。外面は刷毛目調整のちミガキ、内面は刷毛目調整のち指によるナデが施されている。

石器

137～142は太型蛤刃石斧である。137は残存長13.4cm、幅5.2cm、厚さ3.5cm、重量480ｇを測る。ミガキ痕が全面に認められ、使用途中に欠損したものである。基部の周辺が若干変色しており、装着痕の可能性もある。石材は安山岩と考えられる。138は残存長11.3cm、幅5.8cm、重量420ｇを測る。使用途中に大きく欠損し、廃棄されたものである。石材は安山岩。139は長さ24.0cm、幅7.5cm、厚さ5.7cm、重量1800ｇを測る。敲打調整ののち、両先端部にはミガキが施されているが、何故か途中で放棄されている。石材は泥岩である。140は残存長10.1cm、幅5.7cm、厚さ4.8cm、重量440gを測る。成形剥離と敲打痕が認められ、敲打調整中に欠損したものと考えられる。石材は泥岩である。141は残存長13.5cm、幅5.5cm、厚さ3.8cm、重量520ｇを測る。風化の度合いが著しく、ミガキが施されているかどうか判然としないが、おそらく製品として完成していたもので、使用途中に欠損したものであろう。石材は安山岩と考えられる。142は長さ10.5cm、幅5.8cm、厚さ2.9cm、重量460ｇを測る。ミガキ調整が全

面に認められ、使用途中に欠損したものと考えられる。石材は泥岩である。

143は小型石斧の未製品であろうか。残存長6.6cm、幅5.2cm、厚さ1.8cm、重量72gを測る。石材は泥岩である。

144、145は敲石である。144は残存長9.5cm、幅8.5cm、厚さ4.6cm、重量480gを測り、縁辺部や正面中央部付近に敲打痕が認められる。石材は花崗岩である。145は残存長7.8cm、幅8.9cm、厚さ4.8cm、重量580gを測る。下縁部に敲打痕が認められる。石材は花崗岩である。

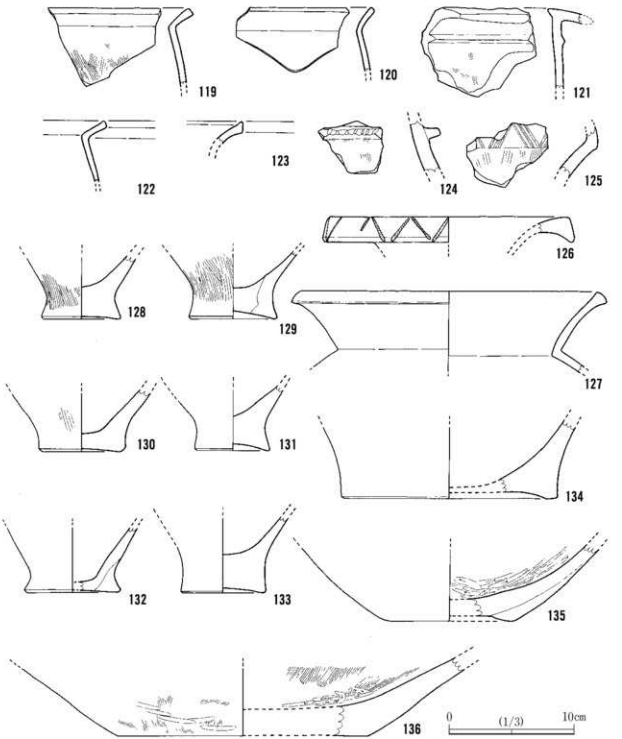


図44 調査区北側包含層出土遺物実測図(1)

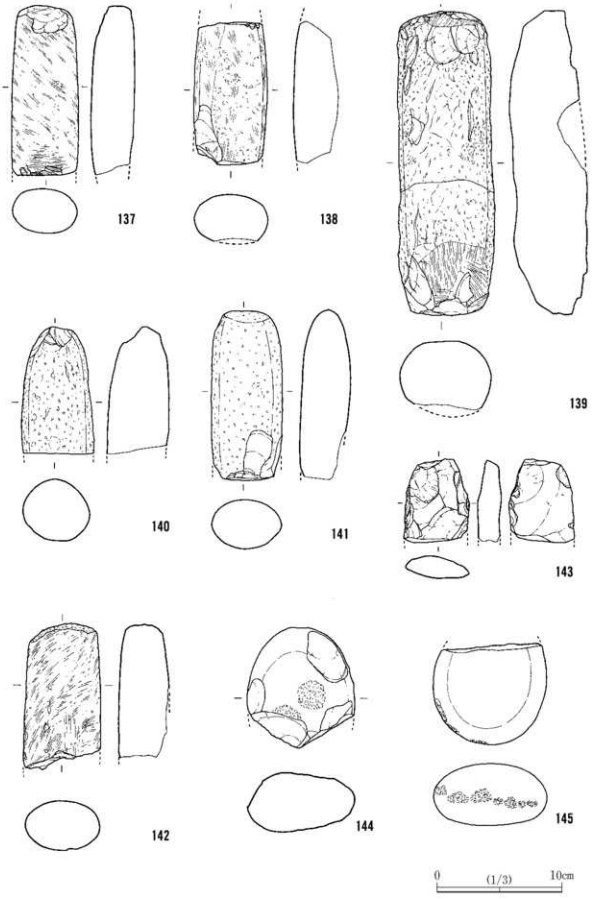


図45 調査区北側包含層出土遺物実測図(2)

Ⅳ　まとめ

竜王南遺跡は昨年度の調査では、中世後半の墓地が検出されたが、今年度は弥生時代の集落跡を確認することができた。以下、調査の成果について簡単なまとめを行いたい。

まず、遺構についてであるが、竪穴住居跡、土坑、溝状遺構等が検出された。竪穴住居については円形プランのＳＢ１、方形プランのＳＢ２を確実なものとして認定できた。出土遺物から、前者は中期中葉～後葉、後者は中期前葉に位置づけられるが、この時期の竪穴住居跡の類例は、山口県内では少なく、特にＳＢ２のような方形プランを呈するものは管見にふれない。ＳＢ２はしっかりした柱穴や、炉跡の存在から住居跡であることは間違いないと思われるが、その形態は特異であり、今後の検出例を待って再検討する必要がある。

土坑については平面プランが長円形、楕円形の形態を呈するものが多く、断面形態が袋状のものは存在しない。こうした土坑の形態的特徴は、近接する下七見、山ノ口、坂ノ上といった遺跡でも確認されており、同一の機能を有していたものと推定される。土坑の中で特筆されるのはＳＫ33で、弥生土器のほか、石器の未製品、剝片、砥石等が一括して廃棄されており、本集落で石器製作が行われ、その残滓が廃棄された状況を看取できる。

出土遺物は弥生土器、石器が中心を占める。弥生土器は遺物包含層から74、75、78、79といった中期初頭に位置づけられる資料が出土しているが、遺構に伴う資料は８、11、43のような中期前葉に属するもの、２，39のような中期中葉～後葉に属するものが目立つ。内接口縁壺の存在や、鋤先口縁を呈する壺や甕の存在は、田部盆地において一般的に見られる土器様相として捉えられるが、126のような垂下口縁壺も認められ、県東部地域との交流を推測させる。ちなみにこうした垂下口縁壺は下七見遺跡においても１点認められる。[1]

石器については太型蛤刃石斧の出土量が圧倒的に多く、未製品、完成品いずれも認められるが刃部まで残存している資料は皆無である。未製品の存在や、ＳＫ33から出土した石斧製作の際生じた剝片（53・54・55）から、本遺跡で太型蛤刃石斧の製作が行われていたことは確実である。また、石斧の石材の殆どが泥岩であるが、こうした石材は付近で容易に入手できるものであり、[2]石斧生産に有利な石材環境と言える。但し、こうした石斧が集落内での自己消費のために製作されたのか、他地域への搬出を目的として製作されたのかが問題となる。

近接する豊浦町の弥生時代遺跡からは太型蛤刃石斧が一定量出土するが、未製品は殆ど含まれておらず、製品のみが認められ、生産地と消費地の関係を彷彿とさせる。[3]しかし豊浦町内で出土した石斧の石材は泥岩に限定される訳ではなく、竜王南遺跡で製作された石斧が、豊浦町内の諸遺跡に持ち込まれたと断定することはできない。そのいっぽう、本遺跡で出土した石器の中で太型蛤刃石斧の数がとび抜けて多いことは、一集落における消費のための製作とも考えにくい状況であり、他遺跡への搬出の可能性があることを指摘しておきたい。

弥生時代以降の遺物として特筆されるのがＳＫ18から出土した銅鈴である。上面観が八角形を呈し、体部に二条の突帯が巡らされるが、山口県内では長門市糠塚横穴群[4]より出土した銅鈴が類似しており、

本遺跡例は形態的には古墳時代の銅鈴に近いと思われる。しかし本遺跡の銅鈴は中世の土師器坏とともに出土しており、この土師器坏（27）はその形態からおおむね15世紀の所産と考えられることから、銅鈴の製作時期と埋納（廃棄の可能性もある）時期に大きな隔たりがある。こうした現象がどうして生じたのか、ＳＫ18という遺構の性格とともに現段階では十分な説明ができないため、今後の検討課題としたい。

最後に遺跡全体の評価について言及し結びとしたい。田部盆地地域では弥生時代前期中頃から集落の形成が始まり、前期後半～中期初頭にピークを迎える。下七見遺跡、坂ノ上遺跡、山ノ口遺跡等が典型的な例であり、こうした遺跡は中期前葉～中葉には衰退もしくは消滅するようである。長門地域における弥生時代集落の動向を見ると、中期初頭を画期として集落の消滅、出現が認められるが、田部盆地も例外ではない。こうした現象は、自然環境の変化、耕作地をめぐる集団間の抗争と再編、人口増加に伴う集落の膨張等々の要因が複合的に結びつき引き起こされたと考えられる。竜王南遺跡では、他の集落が衰退、あるいは消滅する中期前葉から集落の形成が始まり中期後葉まで継続する。また、本遺跡は標高約45ｍ、水田面からの比高差約23ｍの丘陵上に立地しており、広義の高地性集落[5]と位置づけることができる。想像を逞しくすれば、拠点的な集落である下七見遺跡の集団が分村した集落として本遺跡を捉えることも可能であり、その背景の１つとして社会的な緊張を想定することもできよう。

今回の調査によって、田部盆地における弥生時代集落の資料が１つ加わることになった。当地域における弥生社会を考察するうえでの基礎資料となるものであり、積極的な活用を望みたい。

註

(1)　宝川昭男『下七見遺跡Ⅱ』菊川町教育委員会　1992

(2)　山口県地学会編『山口県の岩石図鑑』第一学習社　1991

(3)　既報告資料のほか、今年度調査を行った豊浦町吉永遺跡でも太型蛤刃石斧が出土しているが、製品のみであり、未製品は出土していない。

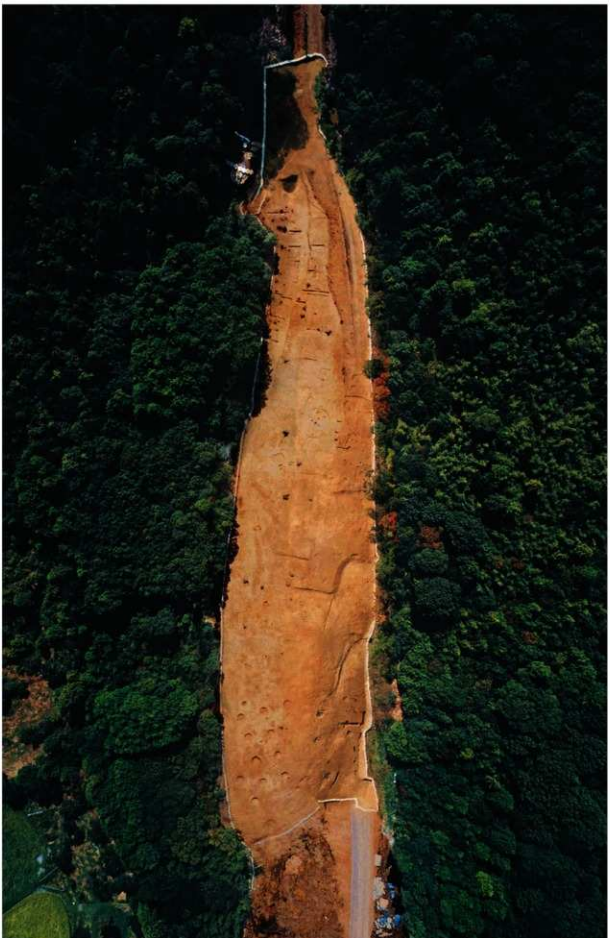
(4)　中村徹也「糠塚横穴墓群」『山口県史資料編考古１』

(5)　乗安和二三「山口県における高地性集落」『山口県史資料編考古１』2000

図　　版

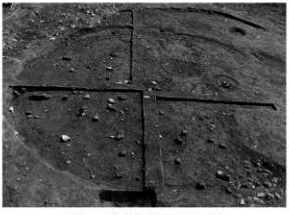
調査区遠景（北東から）

図版　2

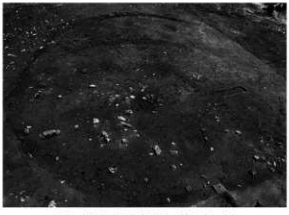


調査区全景（北東から）

SB1　完掘状況（南から）



SB1　土層断面（南西から）



SB1　遺物出土状況（南西から）

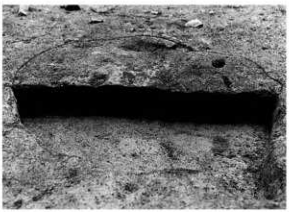
SB1内炉跡　遺物出土状況（南西から）

SB1内柱穴　土層断面（北東から）

SB2、SK25、32、33、34、SD6　完掘状況遠景（南東から）

SB2　土層断面（南東から）

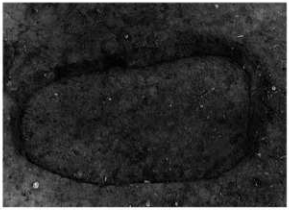
SB2　遺物出土状況（南から）



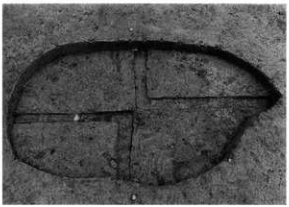
SB2内炉跡　土層断面（北から）

SB2　完掘状況（南西から）

SK1(中央)、SK3(左下)　遺物出土状況(北西から)

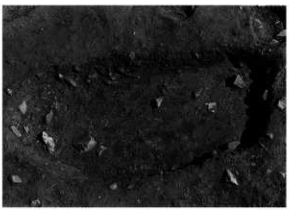


SK4　完掘状況（南東から）

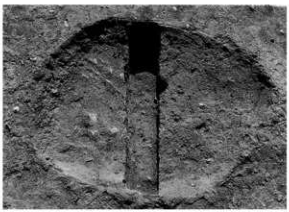


SK5　完掘状況（南から）

SK6　完掘状況（南東から）

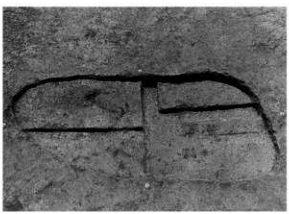


SK8　完掘状況（北西から）



SK9　完掘状況（北東から）

SK10　完掘状況（西から）



SK11　完掘状況（北東から）

SK12　遺物出土状況（東から）

SK13　遺物出土状況（北から）

SK18　鈴出土状況近景（西から）

SK18　鈴出土状況（南から）

SK18　完掘状況（南から）

SK15　完掘状況（北西から）

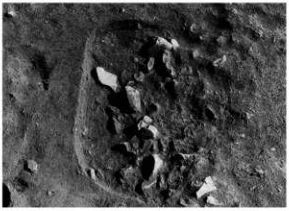
SK16　遺物出土状況（南から）

SK17　完掘状況（南東から）

SK19　完掘状況（南から）

SK20　遺物出土状況（南東から）

SK21　遺物出土状況（北から）



SK22　完掘状況（南西から）

SK23　完掘状況（南西から）

SK26　土層断面（南から）

SK26　遺物出土状況近景（南東から）

SK24　完掘状況（南東から）

SK27　遺物出土状況（西から）

SK29　完掘状況（南から）

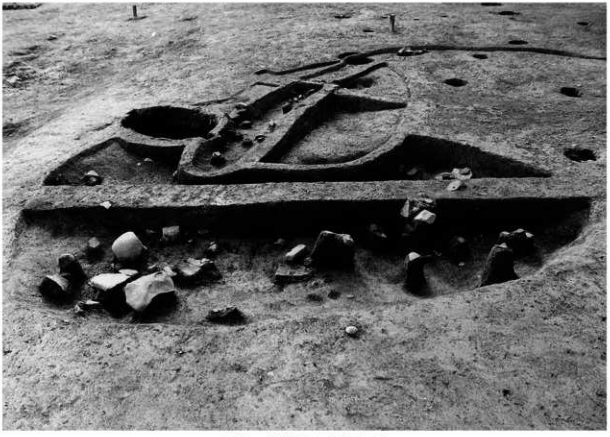
SK30　完掘状況（北西から）

SK31　完掘状況（南東から）

SK35　完掘状況（東から）

SK36　完掘状況（北から）

SK37　完掘状況（北西から）



SK33　土層断面（北東から）

SK33　遺物出土状況（北東から）

SK33　遺物出土状況（北西から）

SK33　遺物出土状況（南西から）

SK32、SD6　遺物出土状況（北から）

SK33　完掘状況（南東から）

SK39　遺物出土状況（北東から）

SK40　完掘状況（西から）

SK41　土層断面（南から）

SK45　完掘状況（南から）

SK14　土層断面（南から）

SK14　完掘状況（北から）

SK28　土層断面（南東から）

SK28　完掘状況（南東から）

SK34　土層断面（南東から）

SK34　完掘状況（南東から）

SK25　土層断面（東から）

SP21　甕底部出土状況（東から）

SX1　遺物出土状況（南から）

SX1西側　甕出土状況（南から）

SX1東側　甕出土状況（南から）

SX1　完掘状況（南から）

SX2　遺物出土状況（南東から）

SX2　甕口縁出土状況（南東から）

南側包含層　遺物出土状況（東から）

南側包含層　トレンチ土層断面（北東から）

南側包含層　遺物出土状況（南東から）

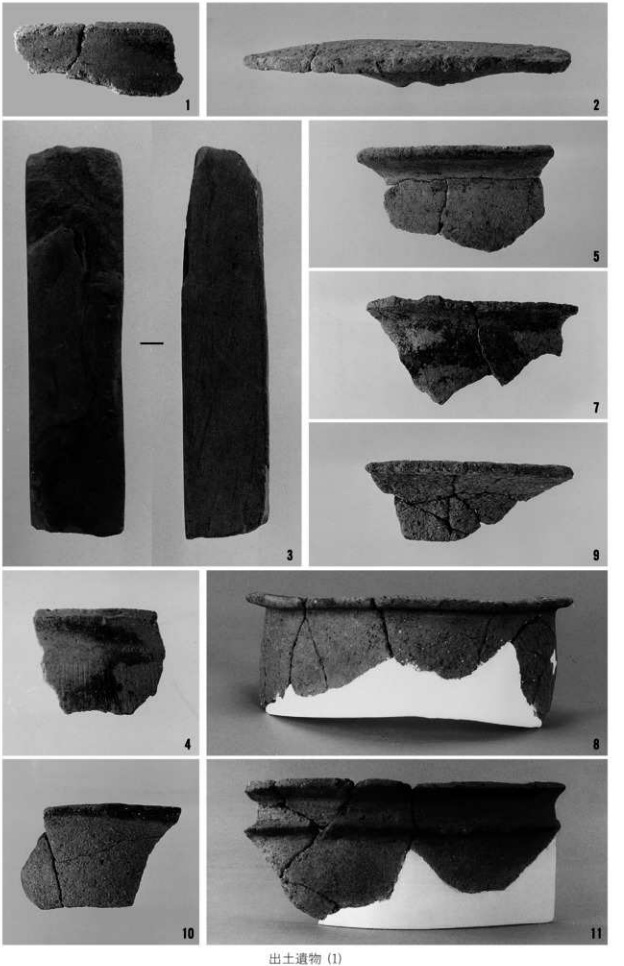
北側包含層　遺物出土状況（南西から）

北側包含層北西区　遺物出土状況(西から)

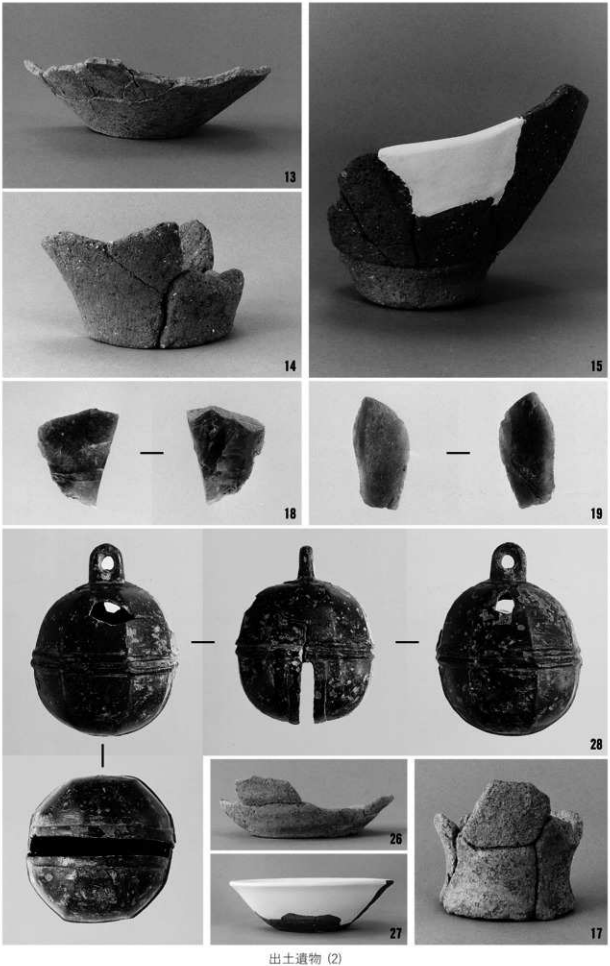
近代炭焼窯　炭化物土層断面（南東から）

近代炭焼窯　排水溝検出状況（南から）

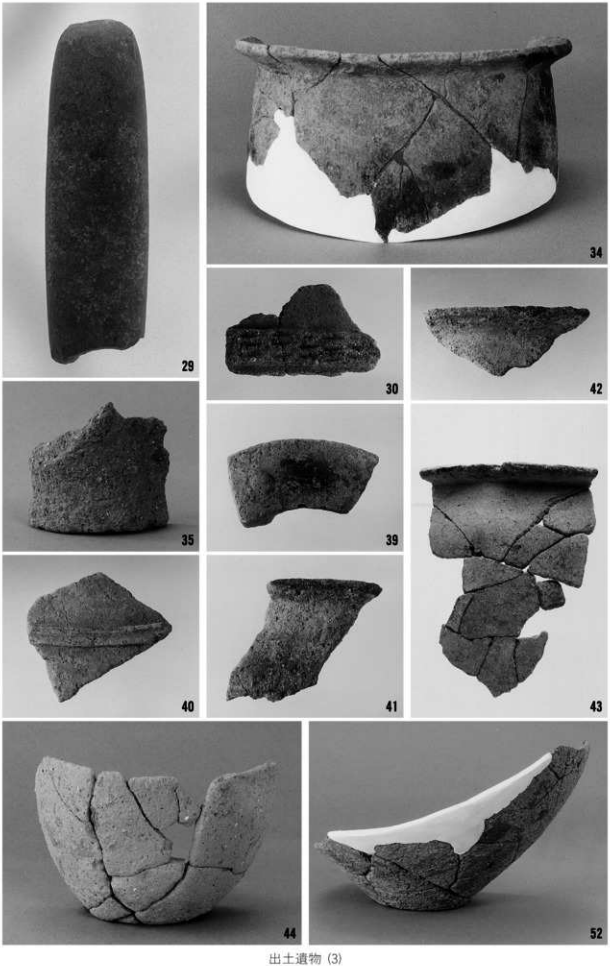
近代炭焼窯　完掘状況（南から）



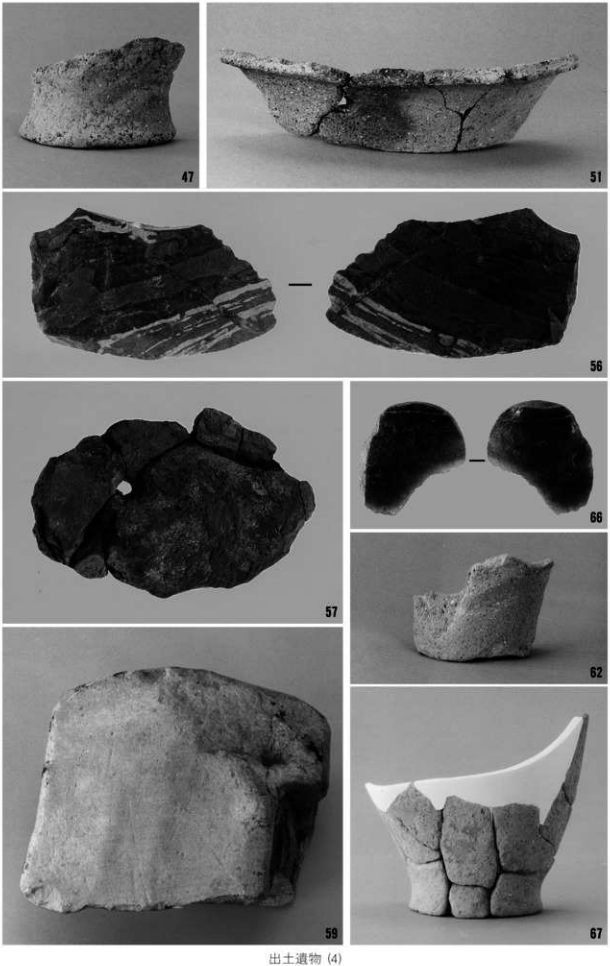
出土遺物 (1)



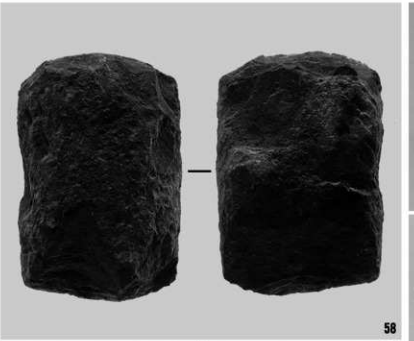
出土遺物 (2)

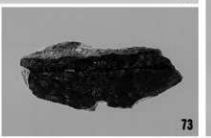


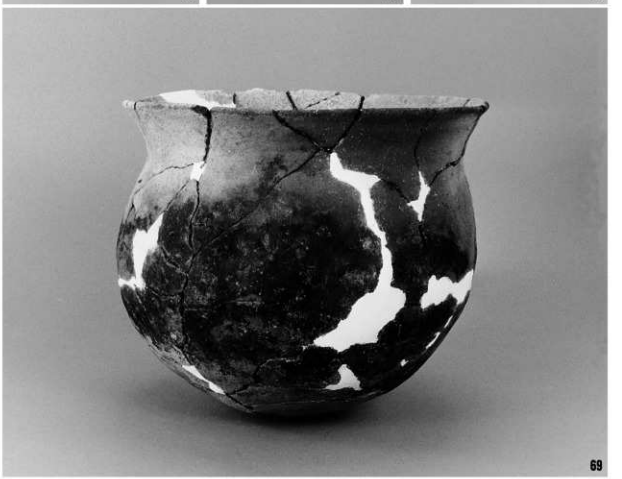
出土遺物 (3)



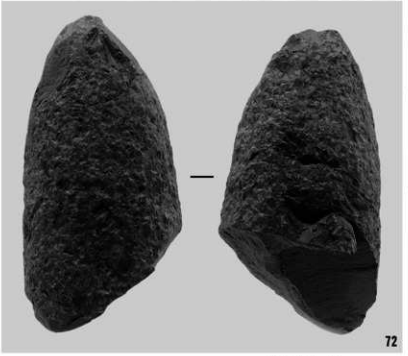
出土遺物 (4)



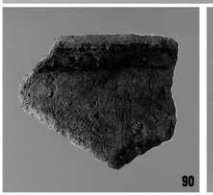


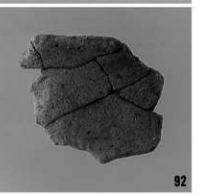


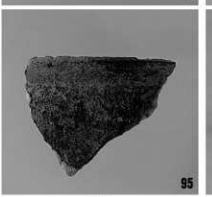
出土遺物 (5)

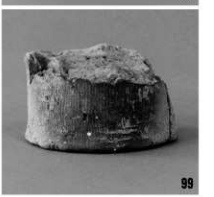


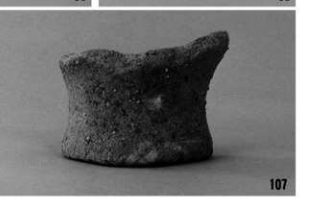
出土遺物 (6)



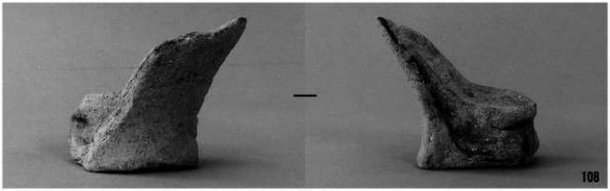


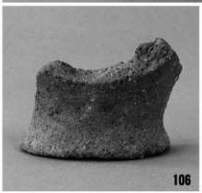


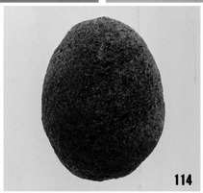


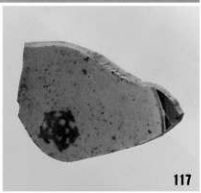


出土遺物

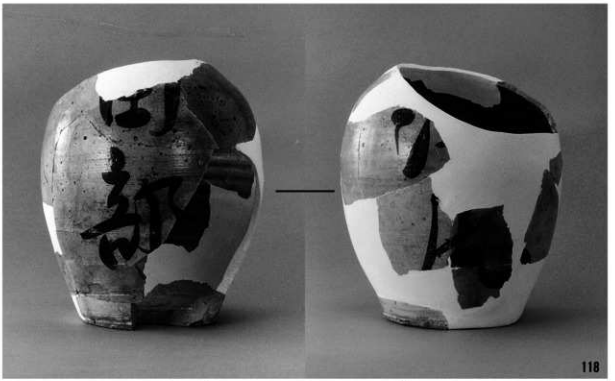


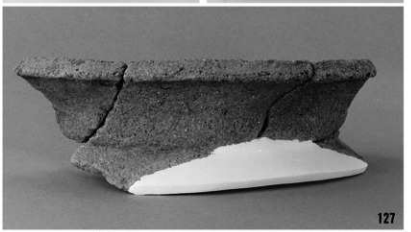




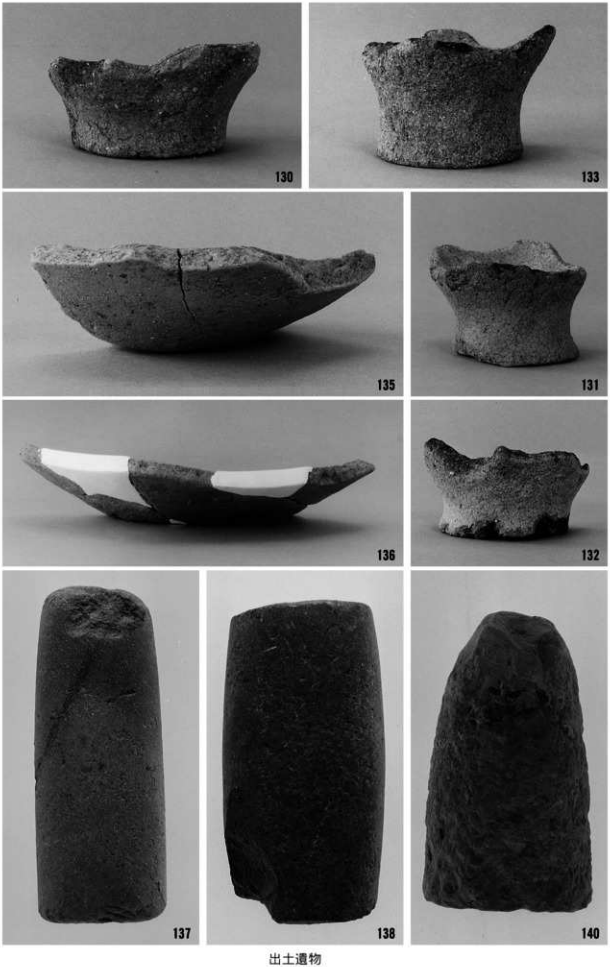


出土遺物

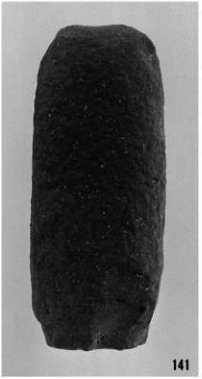


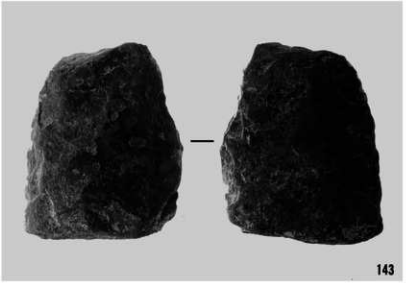


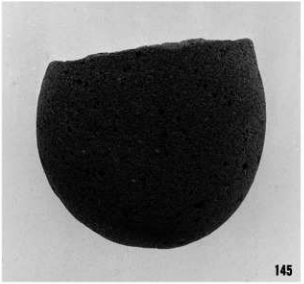
出土遺物



出土遺物







出土遺物

報告書抄録

ふ り が な	りゅうおうみなみいせきII
書　　名	竜王南遺跡II
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第37集
編 著 者 名	小南裕一　　上田俊宏　　徳永　裕
編 集 機 関	山口県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒753-0073　山口県山口市春日町３番22号　TEL083-923-1060
発行年月日	西暦2003年３月27日（平成15年３月27日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯 °　′　″	東　経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
竜王南 遺跡II	豊浦郡 菊川町大字 吉賀・七見	35441		34°6′57″	131°0′46″	20020508 ～ 20021210	4,000	農道整備

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
竜王南 遺跡II	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡　2軒 溝　8条 土坑　45基 柱穴　約140基 不明遺構　2基	縄文土器 弥生土器 土師器 陶磁器 石製品（斧・敲石・磨石・砥石） 銅製品（鈴）	

山口県埋蔵文化財センター調査報告　第37集

竜 王 南 遺 跡 II

2003年　3月

編集・発行　財団法人山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073　山口県春日町３番22号

印　　刷　大村印刷株式会社
〒747-0849　山口県防府市西仁井令１丁目21－55